

1414

163
403

田川大吉郎著

國運の進歩と基督教

東京

警醒社書店發兌

020637-000-9

特18-936

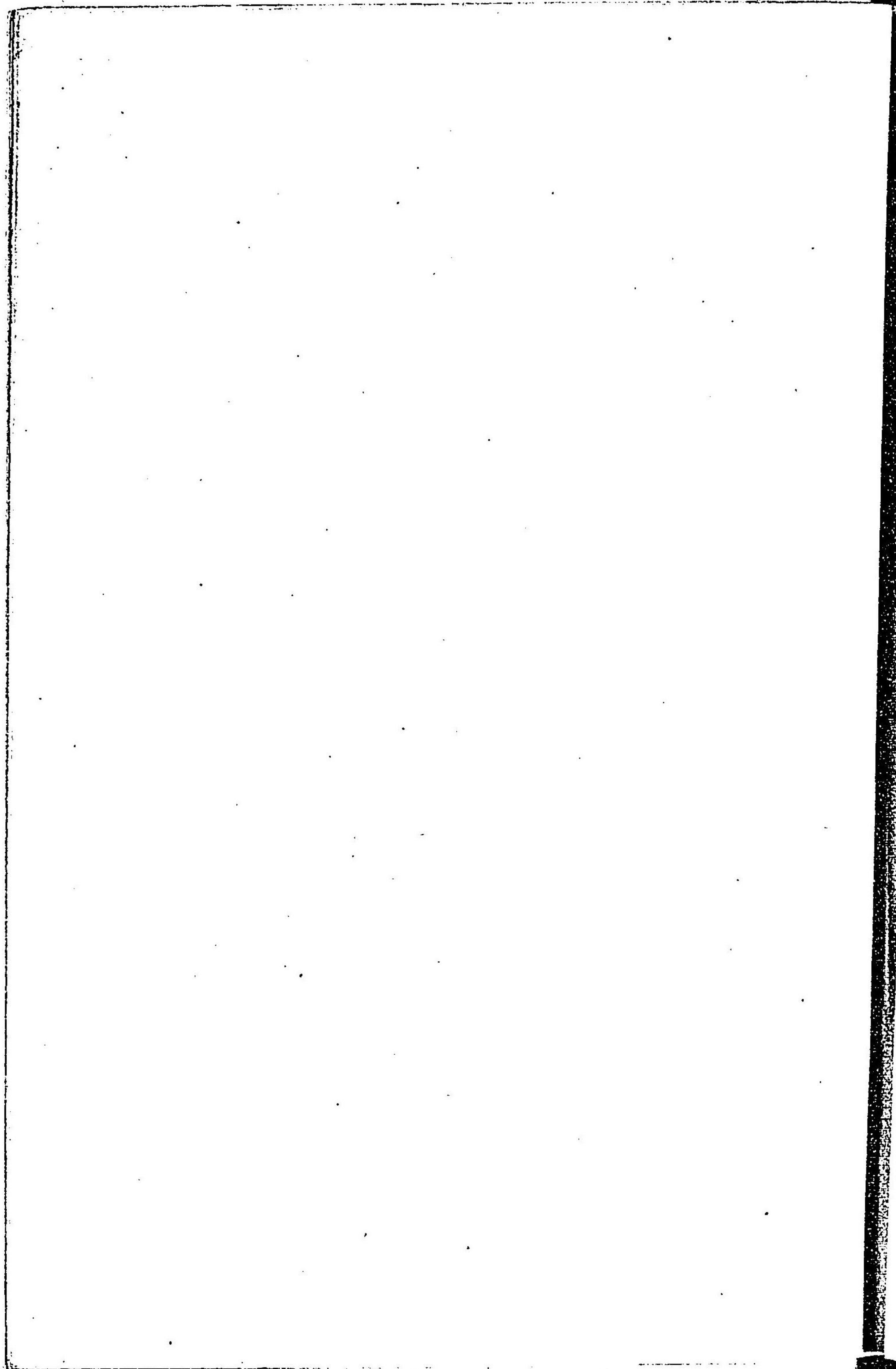
国運の進歩と基督教

田川 大吉郎 / 著

M29

ABI-0453





特18
936

國運の進歩と基督教

田川大吉



序論

| | | | | | | | | |
|---------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 國 | 運 | の | 進 | 歩 | と | 基 | 督 | 教 |
| 日清戦争以來、 | 運 | 進 | 歩 | の | 氣 | 運 | の | 下 |
| 日本 | の | 國 | 運 | は | 著 | る | し | く |
| 進 | 歩 | し | た | り | と | 云 | ふ | 、 |
| 余 | は | 此 | 國 | の | 運 | 進 | 歩 | を |
| 希 | 望 | す | 、 | 而 | し | て | 基 | 督 |
| 教 | を | 我 | 國 | に | 輸 | 入 | 、 | 移 |
| 植 | せ | ん | こ | と | を | 希 | 望 | す |
| 、 | 而 | し | て | 基 | 督 | 教 | を | 輸 |
| 入 | 、 | 移 | 植 | し | 得 | る | に | あ |
| ら | ざ | れ | ば | 、 | 日 | 本 | の | 國 |
| 運 | の | 真 | 正 | な | る | 名 | 詞 | に |
| 歸 | し | 了 | ら | ん | こ | と | を | 怕 |
| る | 、 | 而 | し | て | 此 | 空 | な | る |
| 意 | 義 | あ | り | 、 | 光 | 輝 | あ | る |
| 文 | 字 | と | 活 | 躍 | せ | し | め | ん |
| た | め | に | は | 、 | 基 | 督 | 教 | を |
| 輸 | 入 | 、 | 移 | 植 | す | る | こ | と |
| を | 最 | 急 | 、 | 最 | 善 | 、 | 最 | 要 |
| 、 | 最 | 良 | の | 事 | 業 | と | 思 | ひ |
| 、 | 道 | 行 | き | と | 思 | ひ | 、 | 方 |
| 法 | と | 思 | ひ | 、 | 理 | 法 | と | 思 |
| ふ | 、 | 此 | く | 謂 | ふ | は | 基 | 督 |
| 教 | を | 、 | 單 | 純 | な | る | 仁 | 愛 |
| 、 | 慈 | 悲 | の | 宗 | 旨 | と | 、 | 唱 |
| ふ | る | 世 | 説 | の | | | | |

日清戦争以來、日本の國運は著るしく進歩したりと云ふ、余は此國運進歩の氣運の下、基督教を我國に輸入、移植せんことを希望す、而して基督教を輸入、移植し得るにあらざれば、日本の國運の眞正なる進歩は期すべからずして、日清戦争以來人おとに唱ふる國運の眞正なる名詞に歸し了らんことを怕る、而して此空なる意義あり、光輝ある文字と活躍せしめんためには、基督教を輸入、移植することを最急、最善、最要、最良の事業と思ひ、道行きと思ひ、方法と思ひ、理法と思ふ

此く謂ふは基督教を、單純なる仁愛、慈悲の宗旨と、唱ふる世説の

序論

外に之を武斷的、進取的基督教と唱ふる他の一面の世説も重きを置きて、中心湧き返るばかりの希望と信念と自然にムラ／＼動き出でたるなり。

蓋し人にも國にも宗教を喚び求むる時期と、排して斥くる時期とあり、日本の今日は其四面の狀勢よりすれば、前者の時期にあらずして後者の時期に屬す、眞に是れ宗教を排して斥けんとするの流風、氣習は世上の先達にまで行き亘れるを見る、宗教傳道は今も最も至難の時なるべし、彼の各地教會の信仰復活、教勢復起等の報を信じて、今年こそ宗教大に振ふべし、基督教を振興、擴張する機今日に在り、機失ふべからずと呼騷するは、或ハ淺人無識の陋見なるならんや、余ハ今日を以て宗教傳播も最も困難なるべき時と信ず、然れども世の宗教布及傳播を以て、果して國を愛し、民を憂ふる至聖、至高の目的に出でたりしめば、宗教傳播の責に任ずるものが、

國進の歩と基督教

百難を排して益々奮ふの元氣を鼓舞すべきは今日に在り、今日は最早一寸の機會だも緩ふべからず、之を緩ふせば機會は背ろ髪振り亂して逃げ去り、所謂國を愛し民を憂ふるの大目的は杳然として潰へ失せん、大切な機會は今ぞ、今ぞ、進んで捉へよ、捉へざるべからず、捉ふるに百難ありと雖も、皆之を排却するの精神、勇氣なかるべからせと信ず、

故に基督教大に今日に振ふべしとの一般の想像には、尙ほ同意する能はざる廉ありども、基督教を布及すべき必要はますます迫りて、基督教にあらざれば、今後の日本を振起し、警醒し、歐洲列國の間に伍して、雄を四海の強國と争ひ、世界文明の潮流に並び棹す能はざるべしとの憂念は、極めて切なり、

一 昨年の冬第一師團に従て金州に役せし時、暇ある毎ハ其頃の其參謀長次寺安純君と相語り、往々長歎慷慨、身の征戰馳逐の際は在る

國進の歩と基督教

をも忘れて、邦家の前途、將來の計にさへ論及したることありしが、大寺君の奇異なる、談論終るおとに、常に下の如き嘆息の辞を吐き、吐く時煙草の吸ひ殻を抛け棄て、天井の裏突き通れがしに眺めつめ、腕こまぬきて、ゆらりとも動かす、深痛、沈吟傍ら人なきが如くなりき、其時の状況、其時の激音今尙ほ耳底に存し、余をして須臾も忘るゝ能はざらしむ、其言辞を約すれば、大畧下の如し、曰く
 吁、長嘆、慷慨するを休めよ、今や起て行ふべき時なり、日本の眞光輝が世界よ認識せられんとして、大手腕ある英雄の起るを待つ時なり、英雄にして在らば、百千の言論皆徒爾のみ、英雄にして無くば、百千の言論皆徒爾のみ、徒らに横談する勿れ、四百餘州亂れて絲の如し、英雄さへあらば、之を割き、之を領し、之を経記し之を伸縮するは容易の事のみ、西郷南州の大手腕あるの人なりき、此人逝きて後ち舉世皆昏々たり、濛々たり、將來の計を

定立して、眞个に身を以て當らんとする人なし、英雄なるかな、英雄なるかな、方今東洋の氣運は、日興り清廢るの運に屬す、東洋興り西洋廢るの運に屬す、日本を提げて東洋の盟首となし、東洋を提げて世界の盟首となすは機今日在り、今日は歴史あつて以來、最も大手腕を揮ふに便利なる時期に屬す、而して行はせ、滔々たる世流皆是れ婦女子の群のみ、惜むべきなり、英雄なるかな、英雄なるかな、我は英雄の出づるを待つものなり、若し一旦英雄の出づるに逢はば、我は千里を遠しとせずして従ひ遊ばん、假令鞭を執ると雖も厭ふ所あらず、ア、どうかして大西郷以上の英雄に就て教へを聞きたいものだ
 ど、當時余は大概君の説に和して同したりしかば、君が屢々大英雄を待ち、西郷以上の人物に就て教へを聴きたしと論結するおとに、余は亦之に就き常に少々く言ふ所ありたり、曰く

國運の進歩と基督教

英雄の空中樓閣の如く、材料なく、日月なくして突如と生じ、突如と消へ行くものにあらず、英雄の祈りの見なり、故に英雄は宗教の見なり、宗教の感應、感化に頼るにあらざれば英雄は生れず、故に英雄を索めんには、熱心、誠實なる國民の祈りを要す、君看よ、普通の人子も其實ハ皆祈りの子なり、祈りの力に頼らずして生れたる子幾何ぞ、况や英雄の行事は國民の榮辱、浮沈に關す、其生出には、國民の熱心、虔敬なる祈り、豫め先づ其地を掃ふて其門を啓かざるべけんや、故に今日は宗教信仰の時なり、宗教改良の時なり、宗教選擇の時なり、先づ宗教を選擇して、力あり、生命ある宗教に歸依せよ、英雄の生出刻を差へずして到らん、其彬々たること冀北の野の馬群も畜ならざるべし、

貴下よ、今が東洋大革新の時なること、某之を諒せり、英雄大に

國運の進歩と基督教

出づるの時なること、某又之を諒せり、然れども英雄を索むるの道、英雄を出すの道、宗教を頼るにあらずして將た何をか恃まん、今は英雄を要する時なり、乃ち又宗教を要する時であらずや、某此に於て基督教の輸入に志なき能はざるを得ざるなり、大寺君は基督教を辭するもの、如くならざりき、然れども亦西洋諸國に於る基督教の勢力、信用を解したりき、余が論して此に及ぶごとに、君は可とも、否とも曰はずして、徐かに余の顔色を眺め、之を助めよ、と言ひたりき、

時勢は今、日清戦争の當時よりも宗教布及又困難の時期となれり、戦争の當時は我國民の宗教心を鼓動するに容易なる時なりき、否、當時は已に宗教心の大に動けるを見たりき、迷信謬惑とは曰へ、諸所の神社、佛閣を參拜、起誓するもの陸續として絶へざりき、以て所求、禱告の觀念が如何ばかり深く當時の人心に蟠まりしやを察す

國運の進歩と基督敎

べし、
而るに戦争は勝ち續けて、債金は回収して、經濟市場は膨脹して、金利は低落して、事業は蔚興して、其商勢は振起して、人々皆満足、逸樂の境に入れり、大寺君の所謂軍人は満足することもあらん、國民は満足することあるまゝとの説は破れて、余が軍人も勝ち誇らん、國民も勝ち誇らん、其結果は危ふしと豫言したる一時の杞憂は、却て其病に中り、凡そ生活費の嵩増したる、物價の騰貴したる、風俗の奢侈したる、嗜好の贅澤化したる、國民は今や榮耀、榮華、飽食、逸豫、安氣、満足の夢をむさぼり、ふけれり、
凡そ宗教心の警醒し難き此時より難きはあらず、我國民は日清戦争の當時に開かしかけたる其宗教的良心を、今又打ちやりて、抛げ棄て、顧みんどもせず、荒草離々、狐狸縱横の境涯に一任せり、今の宗教心復活せりなど、稱するは、豈一二三四各教會の近狀に迷は

國運の進歩と基督敎

されて大勢を視誤まりたる言にあらざや、其大勢に於ては、今は決して宗教布及に容易なる時よあらざるなり、人心萎靡し、社會眠り、道念危し、何の宗教普及に便利なることか之あらん、
然れども是れ其形勢に就て之を言ふなり、大寺君の曰はれし英雄の手腕の試さるべき好機會は今も尙ほ存すること當時の如く、而して其ため先づ地を掃ひ庭を淨めて英雄歡迎の備へを爲さるべからざる必要今も尙ほ當時の如く存し、新宗教を迎へ、新生命を稟け、以て一大革新を成し遂げざるべからざる必要は益々迫りて疑ふべきなし、而して其新宗教なるもの基督教を舍きて其れ孰れぞ、
且つ日清戦争の結果、日本は其尙武的勢力、物質的進歩に於て、歐米人の驚嘆、同情を惹き起し、今迄の納所坊主、小家住居の窮措大は、躍々として老人、大家、先進、碩學の間に進み出で、之れと智勇を對角して、其奥許しを受けざるべからず、今や已に挺身して

で、衆人環坐の場中に屹立する身分と爲れり、世界の潮流に順ふものは起り、世界の潮流に逆ふものは亡ぶ、此理ふるしと雖も、又以て基督教が我國民に迎へられざるべからざる所以を説明する一理由と爲すに足るべし、而して其武斷的性質は我國民が安んずべからざるに安んずべからざるに甘んじ、安んずとして盛時又孤負する情弱、逸豫の氣を喝破して、面の皮を剥ぎ、胸底の義氣、本心、精力を刺激して煥發するに足るべく其進取的性質は、又以て今の進運に駕し、世界の潮勢を操つり、姑息を戒め、小成を制して、絶へず進取の氣勢を激して、其發達、大成を望むに足るべし、余は日本國運の進歩を希望するが故に、基督教の輸入を欲す、而して已に國運の進歩と稱しつゝ、基督教之が中心爲とらざるを見て、遺憾と思ふ、而して基督教を中心とせざる國運の進歩は譬へば空中

樓閣の如く、根底なく、基礎なく、浮々焉、蒸々焉、一時の幻像、假影に止まるものなりと思ふ、故に之を活剥して其真相を露出せしめんことを欲す、故に今日は基督教普及に極めて大切なる時期なるを信ず、而して基督教徒が此時期に無頓着なるか如きに大不満足の感慨を抱く、國運の進歩と基督教、是豈風馬牛相關せざるの問題あらんや、余は今日に於て我國民の宗教感情に訴ふる所なき能はざるなり、而して更に基督教徒に對して、一大激奮を希はざる能はざるなり、心を靜にして之を思へ、基督教の布及に百の困難湧き起るとも、今日に於て基督教の根底を深く我邦人心の中に養ふ能はずんば、想ふに基督教の將來を如何せんとするや、而して其愛民愛國の志を如何せんとするや、更に日本國家の將來を如何せんとするや、國民よ、尙武的勇氣と、物質的進歩、其空名に眩惑する勿れ、基督教徒よ、

一、教勢復興の空元氣にアマリ多くを望むと勿れ、二、滿腔の希望、勇氣を揮ひ起して、堅實なる傳道の基礎を備へよ、今日は基督教布及に大切な時なり、基督教移植に大切な時なり、會て著したる「第二維新と基督教」文拙にして句も拙、語も通暢を欠く所あり、情も圓融を欠く所あり、加ふるに時勢小變、歴証する所の記事、狀勢、今日の要に合せざるものありと雖も、又聊か著者の斯志を説明するに足るべきものあるを以て、再び校して謹みてさへぐ

(明治二十九年四月二十五日)

第二維新と基督教

田川大吉郎著

第一 第二維新の語

第一 第二維新の語

○始めて「第二維新」の語を用ゐたるを何人と爲すや、明ならず。已に斯語を襲用せしからん、之を點出したる前人の誰たるを究むるは、當然に著者の責なりしも、著者の懶散自ら廢せる、終に此責務を果す能はざらん。ハ之を檢討するに、多少の日子を要すべきは、其益の其勞を償ふべきは非ず、且つ其意義の在る所は、其文字を用ゐたる最初者を知らざるも、之を會するは難からざれば、已に其意義を知らば、其點出者を究めざるも事よ於て大害なかるべしと信じてたるに由るあり。但し時勢の傾注する所は投じたりといふものも、此の如くは勢力ある語を點出したる最初者を究むるは、文界の没

緊要の業は非ざるべく、切は其傳統を得たき者ありと思ふ。私念若し大に謬らすの大方博雅の君子幸に教正を賜へよ。

○著者が斯語を見たるの初の國民新聞は在りしが如し、其れさへ國民新聞の何の論文、雜録中よ之ありしやを記憶せざれば、果して國民新聞にて見たるを最初と爲すべきか、若くは其以前に於て、各新聞雜誌を閲する際、早くも斯語あるを見て、胸中三分の推服の念ありける折から、國民新聞を見れば、累篇重章之を箝充するより、益々斯語の新警快活なるを服し、之に感動せられて傾倒したる者や、其前と其後との今之を詳にせず。中よも國民新聞こそ最モ多く斯語を用ゐて、用法にも變化多く、風韻に富み、殊に明白穩當を極めたるの事實の誣ふべからざる者とす。因りて得たる感覺の此新聞紙は刻畫せらるゝと深かりしを、争ふべからざるあり。著者の斯語を使用するに於て、深く國民新聞紙は負ふ所ありとや謂はん。

教 督 基 と 新 維 二 第

教 督 基 と 新 維 二 第

○然りながら第二維新の語は、始めて用ゐられてより未ダ多日を経ざるに、天下を擧げて早くも之に風動せられ、凡そ遊説、智弁、博學宏偉の士、必ズ之を以て套語と爲さるゝの無く、通邑大都より寒村僻邑に至るまで、其唱和を見ざるの無し。其勢は恰モ火の原を燃くよも似て、炎々として防ぎ止むべからざるもの、第二維新の機已に熟し、革新の意思天地は磅礴せるよ由るならんも、之をして此に至らしめたるの第一維新の語の先づ人の肺腑に入り、欣慕快慰の府と爲り、其情牢として抜くべからざるを以てなり。若し第一維新にして第二維新の先容を爲すに非ずんば、ヨシ第二維新の時なるかな命なりと曰ふとも、此滔天の勢を激成する能はざるべし。看よや、世間の第二維新を叫破する政治家、新聞記者、有志士の中よ、第二維新との何等の義より成る者やを解せざるもの其多きを占むるなり。其意義よの解通せざるも、世人の之を叫號するを見て、流れを

逐ひ風を望みて、層用反覆するもの多し。倭人觀場の意も此くや、笑ふべきの事どもなり。サレド其能く此に至るを得るもの第一維新の功ありとせば、此際第一維新の語意も之を究めざるを得ざるべし。○其研究の之を次回譲るとせん、此に其語意は格別の目的あるを言ふべきのみ。則ち第一維新の語の嘆美の意を含めるも、第二維新の語の希求の意味を含めり。其差別の由て來る所以の、第一維新との事後の回顧なるも、第二維新との事前の豫望あり。別語もて之を言へば、第一維新を促成したる幕末當年の浪士の、只政權を朝廷に歸せんとしたるのみ、敢て第一維新の語を叫破せざりき。之を點出したるの後人は在り。後人の幕末明治の際の推移過渡を望見して其心事業の光明正大あるは驚き、之を歌頌して下すは第一維新の語を以てせり。第一維新の語の嘆美の意を含むと爲すもの此に在り。第二維新に至ては然らず、其事業の未だ成功せずして、今の未だ經

過の旅中にもあらず、纔に發足の決意を告げたるのみ、準備ヲサナサ怠りなき際なれば、何の年より何の年までを第二維新の期と曰ひ、何の事業と何の事業とを第二維新の功と曰ふかの、今以て之を概定するを得ざるなり。隨ひて其前途の晴か雨か、險か夷か、善か惡か、得か失かの、辨へ知る由もなく、必ス第一維新の美果を収むべしとも限らざるなり。シカモ第二維新の語を用うる所以の、第一維新の名は縁かり、之と同様の美果を収めんと欲するにやあらん。希望の意此に於て生ずるあり。即ち第一維新との事の已に成りたるを示し、第二維新との事の未だ就らざるを示す。第一維新との他人の頌語あるも、第二維新との自畫自賛に外ならず。自畫自賛の戒むべく懼るべきものなるも、唯だ其事業未だ就らざる中なれば、此は希望あり、光明あり、花もあり、實もあり、苦もあり、樂もあり、第一維新の語の如く乾燥無味ならざるなり。

○或の第二維新の語を病む者あり、其主張する所の正大痛慨にして、能く時弊に中り、兼て人類最高の希望を表章したるを病む。之を病むの其唱説の道理に合はざるを病むにあらじ、却つて其學理も適し人情も合へるも、之を今日も實行せんとするの、難きを人よ責むる者にて、政治家の經綸も非すと爲すに在り。是固より至當の非難なり。熟々第二維新を叫破する政論家の言を聞くも、其語の壯快にして其意の正大なる、得て間然すべからず。皆是先哲智謀の士の之を確立するの意あり、古今來の英雄豪傑の、吾こそ此功を成して一世の人心を動かし後世の光りとも爲さんと逸りしも、皆功を成す能はずして已みける政治上の格言信條なり。ナルチ今日も遂行せんと欲するの、其觀る所智識も偏して事業に疎く、推理も長じて行實を欠ぐの嫌ありとすべし。ナルト一概も之を以て之を難するの當らず。是希望の言なり、祈求の意あり、人心の奥も存する理想を歴述して、

之を粧ふも絶美の文を以てしたる者なり。假令政治の一部も局したりとも、今の紛々たる黨争者流か此の如きの理想を抱けるの、寧ろ喜ぶべきなり、必しも其浮言を責めじ、取りて行ふの責の他の事業家に在り。

○基督教諸君子にして邦家の將來も憂へなければ則ち已む。我國民の前途も望みなければ則ち已む。若し多少の憂へと多少の望みとあらば、今日の當も之を揚言する時なるべし。或の之を揚言せば其理想に偏依し希望に拘り、他をして實行に難ましめ、己の浮言の誹りを得んことを懼れて之を言はざるか。サヲバ之を問はん、諸君子にして之を言はざれば、之を言ふ者の獨り政治的狂人あるのみ。其第二維新も望む所の政治的革新にして物質的進歩のみ。是亦可あらざるも非ざるも豈我邦の第二維新も望む所を以て此に止まると爲すか。別して基督教諸君子の第二維新も望む所の此に止まると爲すか。然

らば基督教諸君子の志す所の一は我邦の政治的物質的進歩に在り、其外に在らざるか。此の如きハ首肯すべからざるの説あり。必ス然らざるべし。而も之を傍觀して手を下しもせず、之を笑噓に附して志を言ひもせざるハ、何たる意ぞや。諸君子の目的と志望との、我國の物質的進歩を圖るに外ならざるべしと難せらるゝとも、何の辭か之を辨せん。

○曾て竊に之を思ひしは、基督教諸君子の、第二維新の語が祈求の義に外ならざるを知られざるなるべし。稍之を知るも之を以て政治上の希望を表明すべき時機なりと臆斷せられしあるべし。サレバ由々しき誤解なり。第二維新第一維新の喚ひ起されたる動機を味ふても見玉へよかし。是宗教上の願望に出でたり、政治上の願望に非ざるなり。サレド今之を論せざらん、後章に於て之を點出せんと欲へば。

○サレバトテ第二維新が事前の豫望を言へる者なるとの、諸君子も之を諒するは難からざるべし。已に然らば、劍を杖つきて此軍に投じ、其材幹を利用して抱負を行へんと、愛國の士平生の志あるべし。誠は今日の其發足點に在り、前程漠々測り知る可らず、其期限さへ明ならざれば、之を大にし之を小にし、之を伸べ之を縮め、之をして唯物的ならしめ、之をして宗教的ならしむるハ、之は投ずる者の希望のマ、なるべし。殊に基督教諸君子のハ一たびハ自ラ革命精神的の氣運を鼓して其事業を大にせんと希望ある者なれば、今日よしと之に乗ずるハ、恰モ順風に帆を揚げたる如く、其力を勞すると少小にして彼岸に達するを得、兼て愛國的義侠の志をも顯揚するを得べし。而して之に就かざるもの、得て解すべからざるなり。若くハ之を以て一政治上の警語と爲すか、思はざるの甚しき者なり。望むらくハ今加何の時に在り、第二維新との何等の義を包含する者なる

やを思へ、必ス豁然として大悟する所あらん。

○著者の自家の短所を知るとに於て多く前人より落ちざるあり。殊に此篇の文章の精鍊を欠き、思想の純粹ならず、學識の豐腴ならず、筆を採りて記述に難み、間々澁苦の處ありたるの能く之を知れり。而も此篇を公よして基督教諸君子の注意を請へんと欲するの、第二維新の語の基督教徒の黙過すべからざる義理を有せるは基督教諸先進の等間よ之を看過せるをモトかしく思ひ、且ツ他の宗教なく道德なき唯物的政治家よ、第二維新の大業を一任するを口惜しく思ひ、慷慨の私情禁する能はざりし由る。此を以て著者の、身を以て魄と爲すの意を存す。諸君子に先んじて鞭を着けたるの、學識才分の諸君子の後に在らざるを信じてたるに非ず。實よ之よ由りて他の先進有徳の士の第二維新に對する意見を聞き、之よ繼ぎて其懷抱する所を述べられんとを請ひ、能く其信念夙望の存する所を表白して、第

第一 第一維新 (上)

二維新を作成せんとする政治家よ、反省する所を知り、參考する所を得せしめんととの微意に外ならず。他日此に至るを得ば、此書の如き死馬の骨として泥土よ委せらるるも悔ひざるなり。切よ諸君子に望む、第二維新の語義を査究せられんとを。

○第二維新を知らんと欲せば必ス先ツ第一維新を知るを要す、第一維新の事業を論ずる者の必ス指を下の數事よ屈するが如し。曰く徳川氏三百年來の權勢を失して朝廷の昔年祖宗の制に復し玉ひしかり、武門權を擅にしたる八百年來の覇府跡を此時よ絶ちたり。サレバ封建制度の廢滅の自然よ郡縣制を起して、又更よ版藉奉還の一舉、我國民の義勇公よ奉ずる志を明よし、世界をして驚嘆絶倒せしめ、四民の階級を廢して之を一に歸し、以て率土の濱よ至るまで王臣よ非

ざる民なきに至り、其初メ公議輿論に詢ひせらるゝの御聖詔、昭として炳日の如く、以て振古未曾有の立憲政治を創せられたりと。此等皆己に歴史上に著明なれば此よの論及せざるこそ可けん。

○オレド以上の説を唱ふる者も亦當よ之を思ふべし。以上の事業を成就して我國の盛名を世界に震耀せしめたる幕末の浪士の、其東西に奔走して具に苦楚を嘗むる當年よ於て、必ス此等の事業を成就せんとの心算あり。目的あり、希望ありしや否と。若し其希望あり。目的あり、心算あり、確固の精神を以て之を貫けりとせば、敬服の至りあるも、或の然らずして以上の事業の如きハ、其進行の勢ハに驅られて知らず識らざるの間よ生じたる、即チ所謂偶然の結果に外ならずとせば、其必然の目的、希望の安くに在りけるぞや。蓋シ其目的、希望の注ぎし所を知りて、始めて其事業の大小、成敗の跡をも論すべし。之を知らずんバ未メ以て之を語るに足らざるべし。決

して其事業の雄大壯烈なりしを以て、其志望の存せし所を忘るべからざるなり。若し之を忘れなバ徒に其事業の大觀よ眩目せられたりとの誹りを受けん。

○著者を以て之を視れば、幕末浪士の目的ハ此に在らざりしあり。凡そ版籍奉還と曰ひ、四民平等と曰ひ、立憲政治の創立と曰ひ、此の如きハ皆幕末浪士の胸中よ存せざりしなり。若し其東西に役々たる中道に於て、一人の卓見者あり、世界の大勢を洞觀して我國も世界の大渦をバ免るべきにあらず、早晚必ス此に歸注すべければ、我徒ハ豫じめ此目的を抱きて運動し、他日此よ至らば、天下よ先んじて劔を脱し士籍を去り、此等の人為的階級を視ると敝履の如かるべく、之を棄つるよ多少の未練の心を存せざるべしと戒飭する者あらば、浪士の必ス其意外あるよ驚き、劔を按じて其首よ加へ、而して天に代りて國賊を誅せりなどと揚言せん。現よ佐久間象山、横井小

楠の徒の開國の氣運已に熟したる途上よ於て非命に斃れたるも、皆其思念の超脱して俗と同からざりしよ由らん。尤も象山小楠諸子の非命の死の以上の引証にの吻合せざるべきも、尙ホ絶世の卓見を抱きて當時に在りたる者の、其終りを善くするを得ざりしなるべしとの推理を爲すよ於て適當の參考なるべし。實に維新以後改革の事業にして幕末浪士の胸中よ存したるの幾何もあらざりしなり。

○幕末の浪士の目的已に此に在らざりしとせば、然らば其生命を賭して東西に奔走したる所以の目的の安くよ在りや。マサカに人の目的をかくして動く者に非ざる也。幕末の浪士も病床に在り饑渴に瀕するの妻兒を去て、立ち出てたる程かりしかば、又且ツ一定の目的のありしや必せり、其目的を何とか爲すや。著者の幕府を打撃するも、の幕末浪士の主の目的よして、朝廷に歸順し皇道を千年の昔よ還さんとするもの、其従の目的ありしと爲さんと欲す。或の尊王攘夷が

第二 維新と基督敎

第二 維新と基督敎

浪士仲間の套語なりしを以て、尊王こそ主の目的にして、倒幕の攘夷よ伴ふ偶然の結果のみ、之をや従の目的と爲すべしと論ずる者あらんも。幕末の政府が怨みを人心に得て、終に潰裂四出するを免れざりし當年の事實に廻りて之を考ふれば、倒幕こそ浪士の志氣を鼓動したる活火の源よして、尊王の念の深く根底を下せしよ非ざるなり。況して尊王以後(政權を朝廷よ歸し奉りたる)の處置の不用意の間よ置かれし者あるも、倒幕の結果の自然よ尊王に歸到せざるを得ず、尊王の結果の自然よ維新以後の改革事業に歸到せざるを得ず、覺へず他の潮勢よ乘じて千里の波間を奔りたるのみ。幕末浪士の心を案するよ、倒幕の主よして尊王の従、尊王以後の事業の勢ヒよ驅られて羈馭する能はざりしものあり。若し羈馭するを得ば之を此よ至らしめざりしこそ其希望なりしならん。

○幕末浪士の目的、尊王の従にして討幕の主なりとせば、討幕論の

由て起りたる原因を何とか爲すや。列藩諸侯の徳川氏殊愛の下に、其封域を安んじ權勢を保つとを得たれば、其思たる少小ならず、宜く之を肝に銘て忘れざらんと期すべきものを、殊遇の恩を斷ちて之に反抗せんとしたるにの必ス其謂ひなかるべからず。世上の論者の之を以て列國通交の事と歸することを常なるか如きも、著者の見る所に異なり。想ふに幕府の列藩に輕んせられたる所以の、其敗風頹俗に在るべし。敗風頹俗との何ぞや。大隈伯の昔日譚に曰く

二百年來打ち續きたる太平に慣れ、大に驕奢を恣にし、遊逸度なく、絃歌の聲日夜絶へず、天下靡然として風を成し、士氣頹敗、武備懈怠、祖宗家康公の遺訓たる勤儉質朴の氣風漸く地を拂ひ、藏帑耗竭、財政紊亂を極め實に言ふべからざる形勢に陥れり、然るに士氣の頹敗の獨り徳川幕府に止まらず、各藩各州皆之に化し、集會の大抵之を妓樓に開き、甚しきの城中に於て、公然骨牌を弄

し、博奕を爲すも、之を怪むものなく、賄賂公行、私謁憚るなく、天下を擧げて蕩然とし怯弱腐敗の極に陥るに至れり。以て幕末の風俗が頹敗して振のざりける一端をも察すべし。風俗の頹敗已に此に至りて其能く亡びざるもの幾何ぞ。(此に大隈伯昔日譚を抜抄したるの伯も亦當時の有志士なれば志士眼中の幕府を映出するに便利なりと信じたるを以てなり)

○實に當年の浪士の幕府を難するに因循姑息を以てしけり。因循姑息が幕府末路の病たりしとの歴史を讀みたるもの皆之を知れば、浪士が當時に於て之を慨憤したりし、之に同情を表しこそすれ、之を難責する者なからんも。因循姑息の偶然勃發の病に非ざるべし、必ずや其由て來る所遠くして深く、一日の故にあらざるものあらん。之を何等の病と爲すぞや。蓋し慢性的精神病か、則ち精神的修養の欠乏不足に原由する者なるべし。幕末の行事を見るに往々よして過

激粗暴に亘れり、獨り因循姑息を以て目すべからざるなり。而も其勇氣すら一旦の妄念雜慮に起り。前後を貫通する大決心なくガハガハと狼狽ウロタまはり、ザツト胸に堪コへて、靜かき思慮を運らす、即ち所謂深沈の氣を欠げり。浪士の因循姑息を以て之を評せしも致し方なき次第あり。即ち其因循姑息を以て、道德性欠乏の結果も出づると評するも誰か之を誣ウソひたりとせん。

○浪士の中より更よ表裏反覆を以て幕府を難する者之ありしが如し。而して表裏反覆の何等の病ぞや。是實に中に一定の信念なきよりして、形勢を視、利害を懼れて、左右進退するに由るものあれば、道念固からず、思慮安定せざるもの其原因なるべし。道念固からずして思慮安定せず、徒よ目前の小成敗を見て、拘々喜憂し、而して大決心なく大目的なきもの、誰か表裏反覆の名を得て、義人の唾罵する所と爲らざらん。幕府の亡ぶるや。又其責を表裏反覆にも得たり。

○浪士の中より更よ幕府の專横を攻むる者ありき。條約締結の事たる攻むるに專横を以てするを得べきや否を知らざるも、幕府の舉措たる專横を以て之を攻むべきもの願ノゾム多かりしハ掩ふべからず。其原因を察するに、幕府が素養足らず、勢力微弱なる割合に、權勢を以て他を威壓せんと企て、即ち所謂鬼面もて小兒を嚇するの戯ウソを爲したるに在り。内空虚なるもの外に鳴るの喩へにやあらん。是又精神薄弱の致す所なるべし。實に幕府の其昔三百諸侯か蒲伏命を聽けるもの皆其祖先積盛の勢力よりたるを知らず、己れ何の備ふる所もなしよ、之を頤使屈抑せんとしけるなり。サテハ謙虛自損の徳たるを知らず、徳を以て衆を懷くるの道たるを知らず、更に人情を鑒みて自ら反省する所以を知らず、終りに短慮躁急、其形を嚴にし、其治を酷にするを以て、治國の能事と爲しけるもの其病の由て伏す

る所なるべし。之を攻むるも専横を以てするもの故なきに非じ。而して其専横の道德の念未だ肺腑に徹せず、博愛忠恕の志其中に備はらざりしは出づ。

○浪士の詭激なるや中にの種々の形状もて幕府を指辱する者ありけり。元來燈火の將に滅せんとするに却て明なりと云へば、幕府もても果して亡ふべき命數なりしならば、此頃にこそ奔放雄大の動作あるべき筈にて、其征長の役の如きの過擧たるを免れず大に列藩の輕侮を招きしも尙ホ積盛の後なれば、仰ぎ視るさへ之を憚る諸侯ありけるも、浪士のみ之を輕視したるの極めて解し難き事の如くなるも、是蓋シ浪士の炯眼ある早く已に幕府の元氣が消沈して用うべからざるを看破したるもやあらん、其後其海軍の勢力當時に冠絶したるに拘らず。俯首爲すなく、官軍の縦横に任せたるを見て之を考ふれば幕府の元氣の消沈せる已に來路あり救ふべからざりしを証するか如し。

○凡そ元氣の消失と曰ひ、道念の不振と曰ひ、確信の欠乏と曰ひ、及び謙虛自損の徳を知らず放恣専横の舉動を爲し、又の因循姑息なりしと曰ふが如き、其流殊なりと雖ども其源の一なり、以て徳義心沈淪して振はず、信用地は墮ち、品行壞敗、体面も尙ふに足らざれば、然諾も重んずるに足らざりし事狀を想見すべし。蓋シ徳義的觀念一たび地に墜れば、敗禍累々、目を蔽ふに遑わらざるもの各國の例なり。獨り我邦の幕末に於て之を見るのみならず。大隈伯の語る所疎かりと雖ども肯綮を得たりと謂ふべし。事已に此に至らば人心ある者の黙して已むを得ざるべし。薩長の先驅を爲すとなかりしとも必ス能く崛起して幕府に反抗するに至りしからん。是天の命逆ふを得ざるなり。

○是故に幕府の亡びたるの幕府自ら亡びたるのみ、薩長土肥の士の

之を亡ぼせしに非ざるなり。薩長土肥の士の已に炎上せる大火よ、束薪を投じて其勢を激したるのみ。爲に幕府亡滅の期を早くしたるどの之あらん、但シ是すら三五年の差のみ。假令薩長土肥の士、慷慨氣を負ひ、四方に奔走するとなかりしとも、三五年の後に幕府の自ラ亡ぶべきの運命を有せしなり。其風俗頹敗、紀綱地に墮ち、士風遊惰、信用空乏したるもの之を証すべし。未ダ信用空乏、士風遊惰よして國興り民榮ふるものあらざるなり。而して已に此極に至りて亡滅困蹶せざるもの之あらざるなり。幕府の亡びたるの天命よ非ずや。看よ、幕末の天下紛糾して未ダ定まらず、四方の諸藩の、尙ホ幕府の勢力を怖れ、逡巡して未ダ決せざりし時、達眼卓識の士の、往々之に説くに、幕末の風俗頹敗、紀綱地よ墮ちたるを擧げて、是衰亡の道ありと爲し、以て幕末の必滅を論じたるに非ずや。幕府の亡びたるの、薩長土肥の士の之を搖撼せしよ非ず、幕府自ラ

亡びたるものよみ。而して先づ之よ刀鋸を加へたるの風俗の頹敗なりき。

第三 第一維新 (下)

○以上の觀察をして誤らざらしめば、著者の此に至りて一轉語を下すを得べし、曰く幕府の亡びたるの宗教衰微の結果なりと。蓋シ僧侶の其聖職を怠りて、琴棋歌舞に耽り、寺院を擧げて歌舞宴樂の地と爲し、而して妓に狎れ酒に溺れて品行頹敗、時の賢達と相會して揖讓自ら守る能はず、甚しきは愚夫愚婦をすら籠蓋する能はずして、宗教の勢力全く地を拂ひたるの徳川氏の末路よ過ぐるの無し。此に至りて一般の世俗が之に習ひ、沈湎流連、淫靡の風一世を動かし、蕩々として遏止すべからざるに至りし自然の勢ヒのみ。僧侶の社會に於る品行上の木鐸にして、宗教の實に風教の柄を握りて一上一

下、之を自在とする者なり。幕府亡びたるを以て風俗敗頽の結果、外ならずとせば、之をして此に至らしめたるは、宗教の衰微に在りとすべし。想ふは其頃の宗教として尙ホ多少の活氣を存せしならば、幕末の風俗の必ス此敗頽の極に陥らざりしあらん。

○已に然らば幕府を打撃したる當年の浪士の必ス其敗風頽俗を掃蕩して剛健朴茂の業に反らしむべき責任を有す。(著者の此に於て責任の文字を用ゐたるを恕せらるべし、前來の書き振りにては此處にも目的若くは希望の文字を用うべきなれど、此等の事明ならざれば、之を包括して此字を用ゐたり何となれば他の敗風頽俗に平ならずして慷慨氣を負ひ、征途に上りし者が、其後之にも劣らざる敗風頽俗を目撃して晏如たるの有るべからざる理のみならず、已に敗風頽俗を撃ちたらば、必ス敦厚の風俗を馴致して之に代へらしむべきと、自然の責任に屬するを以てなり。而して風教の柄に宗教之を握れり

とせば、善美なる宗教を撰み、以て風教革新の基を建つると浪士本來の使命なりしと謂ふべし。此功擧らずば浪士の運動の徒勞に歸せしを免れざるなり。

○カラバ其宗教の何々ありや。佛教と儒教とのみ。サリ乍ら此二宗教の幕府の風俗係りと爲り、其教鞭を揮ひたるものなり、(儒教の宗教を以て目すべからざるの著者も之を知る、然れども儒教の徳川氏時代に於るは、稍宗教的性質を帯へせて、崇奉せしめられたるの事實と謂ふを得べし、此に其宗教ある義を廣く解せられんことを希ふ)而して其風俗の日に汚下し就き、之を救止する能はざりしとせば、其人心を保維し道德の活氣を鼓吹する勢力に乏しく以て頼みとするに足らざるは、幕末の浪士の如き推理的研究を爲さざりし者と雖ども、之を想ひ到りしと謂はんより之に看及ばざる可らざる實狀なりしと謂ふべし。故に幕末の浪士の其敗風頽俗を見るは見兼て颯起

第二維新と基督教

したりしも、宗教撰擇の一段に至りては、撰び得べきもの只佛教儒教の二教なるに、二教とも嘗て之を試みて意外に効なかりし者なれば、再ひ之に倚頼するの其欲せざる所、之に依頼せざれば之を振刷するの道なく、殆ど其處分に當感せし者の如し。而も之を選定せざれば、其責任の未だ完からざるなり。

○此を以て幕末の浪士の選ぶる神道を以てせり。神道の教へたる我國に特有す。サレバ古學者の之を以て我邦の萬國に冠絶する所以と夸唱するも、其宗教を以て視るべきや否の蓋し疑問の伏する所なるべし。(著者の如きの宗教を以て神道を視ざる者の一人なり)サレド幕末の浪士の之に念及するは遠あらざりしかば、只其改革を想ひ起したる初一念を達せんとして、即ち神道を喚び起して之を托するに教權を以てせり。但し是すら宗教の何たり、神道の何たるを辨知して此に及びたるは非ず、維新の初めは之を不問に置かんとせしも其後

第二維新と基督教

國の宗教をくして立つ者も非ず、國民の信條迷離するの國家大敗の基たるべき事情層出せしかば、儒佛二教を厭ふの情、知らず識らず、神道に依頼するに至りけるならんと、軽く解する方可なるに似たり。而も結果より之を論すれば儒佛二教を去て神道を撰みたりと論ずるも大謬も非ざるが如し。

○此故に浪士等の心に宗教の何たるを知りしにあらず、只儒佛二教の爲すなきを見る其側は神道の伏するを見て、忽ち之に倚頼するに至りしと解すると、能く當時の事情に契合する如くなるも之をして此に至らしめたるに、必す又其他に重因ありしとあり。之を何とか爲すや。著者の之を以て政權皇室に歸したる餘勢と爲さんと欲す。想ふに幕末の當時は非常の熾盛を極めたる尊皇論の中より、皇室が名譽の源たりとの意も、公平の府たりとの意も、道德の中心たりとの意も、正義の儀表たりとの意も籠れるなり。即ち政權一たび皇室

の動機たりし精神的進歩を度外と措くに至れり。是太謬なり、改めざる可らずと。

○此の如く論究する所以の何ぞや。實は維新の心と世の謂ふ維新の事業との其目的を同くせざるを訴へんと欲する也。即ち維新革命を促せる心の道德風教上の問題として、物質的形式組織の上は在らざりしとを告げんと欲するなり。之を知らざれば第二維新の喚び起されたる所以も解すべからずして、今日の形勢すら察知し難かるべきを懼るゝなり。敢て之を以て維新以後の改革事業を難するは非ざるぞかし。改革の事業の尊重すべきの著者能く之を知る。然れども今は於て反省せよ、吾人の今尙維新當初の精神を抱持して終始一貫風教道德の進歩の爲に心を用ゐつゝありや否と。

○若し其風教よして改良せられず、依然古態を安んじて士風遊惰、賄賂公行、言は信義なく、行ひは節操なく、志氣沮喪して振はず、

第二 維新と基督

徒は利害を慮るゝ急よして、大義名分を輕んずると、今尙ホ幕末の當時の如くならば、幕末浪士の精神の未だ貫かれざるあり、若し國民の信仰薄弱よして、信條迷離、動もすれば謬妄に近く、宗教の有れども無きが如く、之あるも之なきと何の擇ぶ所なく、宗教家の信用皆無よして其品行の世の儀表と爲るゝ足らず、宗教の勢力蕩焉として地を拂ひなば、幕末浪士の精神の未だ貫かれざるなり。假令版籍の奉還せられ、四民の平等視せられ、立憲政治の新に成り、而して政治文學、工藝機械百般の改良の効を奏せりとも、是將々何の効ぞや。而して今果して如何の俗は在りや。

○明治以降社會の變を見ると多し。西郷大久保等が下宿屋に籠居し、腰弁當を携へて臺園に出入し、出入必ズ徒歩を以てし、曾て車馬は駕せず護衛を隨へず、一日雨降りて傘を持せず、濕ひて宮門に至れば門吏の其誰たるを弁せず、視て判任等外若くは出入の用達と爲し、

之を誰何して通せず、拘禁して放たず、捕ふる者之を捕へて嚴責し、捕へられし者の俯伏して命を聽き、敢て抗弁せず、又自家の譴たるを明よせず、以て門吏をして其職守を遂げしめたるが如き、質朴簡易の風欽仰に堪へたる者あり。流石に幕府を攻撃して其浮華靡麗を罵りたる當年の意氣尙ホ存してや。然れども風俗を化するの朞月の能する所非ず、人力の能する所に非ず、必ズや宗教の超自然的靈感に倚頼すべし。而るを宗教か、宗教に非ざる神道を喚び起し之を扶植して恢張せんと欲す、明治の維新が中道よして沮敗し、今已に混亂衰敝を來したるの自ら招ける過ちに非ずとせんや。

第四 明治社會

○明治社會の先づ神道こそ風敎上の柄を握りしも、其後久しからずして、佛敎の用ゐられ、儒敎の用ゐられ、各々其勢力を振へり。

其前世紀に於て已に衰敝して用ふべからざるの極に陥りたる二敎が、此に至りて又國民の仰慕する所と爲りたるもの怪むべきが如きも是實に神道の宗教的生命を有せざる故あるべし。若し神道にして宗教の實を保ち、果して人間死生の柄を握り、靈魂を救拯し、風敎を振作すると、他敎に讓らざらしめば、明治維新の士は、其初々偶然の勢に驅られたるも、必然の理よ促されたるもせよ、一旦之を國敎の位地よ立たしめられたれば、後々遽然として佛儒二敎を迎ふるを要せざるなり。否、遽然と謂はんより、漫然と謂ふこそ可けん。佛儒二敎の爲すなきを見て之を排したるも過去の夢なれや、其漸々首を擡ぐるよ及びては、看て見ぬ振して之を厚遇し、自然に其をして勢力を養ひしめて、之よ與ふるよ好地位を以てし、其正統繼續者神道の光輝を奪ふにも及びざるべきなり。而して隱暗の間に此潛運黙移を助け成して、神道を排除するともなしに、佛儒二敎を擧げたる

截然たるべきの望むを得べからざるなり。此を以て明治の事業の前
後相呼應せず、往々支離滅裂の跡を露し、國民をして歸向よ迷ひし
ひるよ至れり。

○サレバニヤ明治の社會の、幕末にも劣らざる敗風類俗を現じて、
其弊滔々、殆ど救ふべからざるなり。賄賂の公行し、官紀の紊亂し、
賭博の流行し、日よ詐欺、欺騙の風を長じ、藝娼妓、私窩子の族、
到る處に滋蔓して、青年學生、糾々の武夫さへ其毒に罹り、而して
下宿屋の樓上に、三味線、月琴、端唄、都々逸の唸り聲相應す、
而して其氣風の遊惰にして、淫猥鄙陋なる、以て文筆の名狀すべき
に非ず、讀者こそ其詳を知り玉はん。竹越氏の著新日本史よ其開
卷第一に幕末の風俗を評叙して、

貞享元祿の頃よ至りての人を斬り身を護るの刀劔、今の黄金を鑲
めて人に誇るの具と爲り、劔を取り銃を取るの手り、今の三味線

を習ふの手と爲り、士太夫縮緬の覆面頭巾を被ふりて道を行き、
小袖の裏を紅よして風に飄らしめ、或は端歌淨瑠璃を習ふて公會
の席に謳ひ、或は茶の湯、插花の堪能よ誇り、甚しき位ある士
太夫よして妓婦と情死する者あるよ至り

との序説あるが、何人か之を以て三十年前の状態とのみ看做すべき
ぞ。明治社會目今の風俗の此に同きなり。而して此の如きの風俗よ
感慨して興起したりし維新の功臣が、此の如きの風俗を今日に馴致
して少しも耻ぢざるの、是豈自家撞着よ非ずや。

○而して考ふべきの此よ在り。敗風類俗の結果の國威の消沈なりと
の事實を近く三十年前に経験したる我國家の、今日已よ幕末にも劣
りたる敗風類俗を現じれば、又幕末よ同き悲惨の境遇に陥るとな
かるべきか。天道の公平あり、常よ善人よ與みすと謂へば、故なき
よ明治社會を偏愛して幕末を偏憎すべきよ非ず。若し幕末よ加へし

所を以て、移して明治社會に加ふべしとすれば、明治社會も亡滅し、就くの外他なきよあらざるべきか。何となれば幕末が亡滅し、就きたる敗風頹俗を、明治社會も之を有すればなり(前項新日本史參觀)。是寒心すべき境遇あり。然るよ之を匡救して頹溺を既倒し回さんとする一人なきが如きの何故ぞ。

○明治維新の變に世界に罕なる一大美擧なりしをれば、之を後世も保維して湮滅せざらしめんとするの萬人の希望なるべく、此點に於ての、黨派の同異、宗教の同異、年齢の長短、位地の高低等の區別さへあらざるべし。而るに之を愛憤するもの一人をしとせば、我國人の眼全く盲せるに非ざるか。此景を見て感傷せず、此俗と浮沈して慨然たる能はずと云ふの解すべからざるなり。若くは國事を等閑視するにや。然らずば明治維新の事業の、大權返上、版藉奉還の二三に止まれりと爲すか。而して維新を喚び起したる精神も全く此に

在りしと爲すか。想ふよ當り然らざるべし。

○カテハ今日の風俗の健全ならざるを知るも、是將々世上の常よしとて、得て改良すべからず、人生の長く此境遇に浮沈すべき運命を有すと想定せるにやあらん。淺慮の至りところ謂ふべけれ。抑々何の面目を以て、幕末の浪士に見て、更よ幕末執權の士にも對せんとする。現在、幕末にも劣りたる敗風頹俗を馴致して、時の敗風頹俗を慨したるも理よ合はず。又之を慷慨したる當年志士の口調を學ぶも可笑し。若し此境遇を以て人生の常と爲し、滿目の敗風頹俗の得て矯正すべからずとせば、幕末を攻撃せざりしとの可なるを見るなり。或の幕末時代に矯正し得べしと信じたるも、維新以後幾時ならずして、淫靡遊惰、俗を成し早くも幕末の舊よ復したるを見て、終よ是こそ人生の常あるべしと悟り、即ち袖手して問はず、其推移に任ずとあらば、何ぞ前時に勇よして今日よ怯なる、何ぞ前時よ智よし

第四 明治社會
て今日に愚なる。

四十

○ア、明治社會の今正に腐敗の絶頂に達しけるあり、更よ之よりも甚しき者あるかを知らざるも、之より甚しき腐敗との更よ何をか謂ふからん。想像の及ぶ所よ非ず。基督の言ひ玉へる、偽善なる學者とパリサイの人も此くや。杯と盤サラの外を潔くして、内よの貪慾と淫慾とを充たせり、白く塗りたる墓の如く、外に美しく見ゆれども、内の骸骨と諸の汚穢よ充てり、薄荷、茴香、馬芹の十分一を取納めて律法の最モ重き義と仁と信とをヌテ駁けり。之をしも見へすと曰ふの其目盲せるなり。之をしも知らずと曰ふの臭人の臭を知らざるあり。ア、皇天の我邦よ不慈ある何ぞ此よ至れるや。剛健朴茂の氣風の我社會に於るの、恰モ陰雲解駁の間よ、潛光を漏せる月明の如くよし、僅に西郷木戸二三子に在朝の間よのみ之を仰ぐを得たりき。今の早衰頹の極よ至りしよ、之を挽回せんとする義人さへ出でざれば、

只々天を仰ぎて浩嘆するの外なきなり。

第五 儒教 ●●●●

○上來の論旨にて讀者の畧ぼ察知せらるべきが如く、徳川氏の治世を通じて宗教上の權威を揮ひたる者の儒教なりしに、明治の初よの之に代へるべき宗教なかりしより、●●●●一時浪士の胸中に横へる宗教の府と爲り、漸を以て神道を導き、儒佛二教を喚び起したれば、明治年間の宗教の、先ツ●●●●と謂ふべき次第にて(其餘儒佛二教の客賓と見るべし)、徳川氏が三百年の平和を保ちたるを儒教の力なりとせば、明治今日迄の昇平を保ちたるの●●●●の力なりと謂ふべし。而も徳川時代と明治時代の別なく、其風俗の敗頹して救ふべからざるよ至りしに相同ければ、此よの儒教と●●●●ある者の宗教的勢力を觀察すべし。蓋シ是亦今日の時勢を會する一法なり。

○徳川氏の儒教を選用了るに就ては、著者の間然する所なし。大に徳川氏絶世の眼識に服するなり。或は其儒教を採用したるを以て、大亂の以後、所在に叛を思ふの徒伏し、兇險殺伐の俗を成せるを疾み、之を靖定して敦厚の風俗に化せんとせるなれば、其心の徳川氏社稷の安を欲するに出で、國家治道の要旨より出でたるは非ず、寧ろ私情の熾んなりしを見るも、其公明正大の心事を見る能はずと論じ之を貶斥せんとする者あり。是實は小人、人の美を成すを欲せざる者とや謂はん。徳川氏其苦の心事を没了する者なり。看よ、我邦に於る武士道其盛を極めて、凡そ擊劔、柔術、武者修行、仇討の類、後世の耳目を壯よするは足る、封建士俗の精粹は此時に鍾まりし者なり。徳川氏の國民を柔弱にせんとして儒教を獎勵せしは非ざるは、此一事之を証して餘りあり。

○オノト儒教の宗教は非ざるなり。其教へたる謹嚴にして方正、多

第二 維新と基督教

第二 維新と基督教

くの鑿戒を含み、刺激を與へ、國民の道德心を鼓舞するに、大に力ありしも、其が講説する所現在に偏して、將來の觀念なく、行實は偏して理想上の秘府なかりしかば、懼るゝ所の人是在り、戒むる所の目前は在り、別は人類を離れて人類の上に位し、人類を監視して、之は懲罰戒飭を與ふる者なかりしを以て、其信念の時より差異あるを免れず、人目を眩しさへすれば惡徳汚行何の憚る所なく、其末流の徒の放縱不規律はさへ陥るを禁する能はざりし。宗教なき道德としての是實は已むを得ざりしなれば、徳川氏が儒教に依頼したる心の賞すべきも、其思慮此に至らずして匆卒之を選みたるは、方法未だ精ならざるの憾みなき能はず、人生の實に我を慈育して長養する最高者を要するを以て、絶へず天を仰ぎて哀鳴苦求するものあるに、悲哉、儒教の天來の慰藉を人心に與ふる能はざりき。

○オノト乍ら深く當時の事情を顧るに是亦已むを得ざるなり。徳川氏

覇府を創するの頃に當りては、佛教の強者の劔を提げて軍陣に臨み、武夫猛將の爲す所を學びて敢て遜色なく、其弱者の世を厭ひ山林に隱遁して、徒ら書を讀み空々無念を事とするのみ、又蒼生を憂へ人倫の大義を提唱するの勇氣なく熱血なく、甚しき妾を蓄へ色を漁り、酒を飲み肉を喫して一般俗界の士と相擇ぶ所なきに至りしかば、其佛教世に存するの虚名に止まり、又正を立て國を安んずるの目途なく、親鸞なきは、痴人と雖も之に倚頼せざるの見易きの理なり。家康の炯眼なる此を知らざるの理あり。此を以て之を貶斥して儒教に歸向しけるならん。當時佛教を除けば儒教に倚頼するの外道なかりしを以てなり。

○已に佛教に倚頼せず、勢ひの實に儒教に倚頼せざる可らざるは、其儒教なるもの未だ大に上世に用ゐられざりければ、隨ひて敗過流毒の人目に炳焉たるものなく、隱々の裏、其養ひ得たる勢力の、

今や人意を強くするに足る者あり。若し之を擢用して其材を展ひしむれば、大に國家の益を成すべしと思はれける。家康の眼を此に注ぎたるも可ならずや。且つ其包含する旨義の家國目下の策に適し、其講論の、空想を落ちずして道義を鼓舞すると共に兼て政治經濟上の法則を富めるとの、皆以て多年亂離相襲きたる後に用ゐて、瘡痍を治し、人倫を振ふに足るべかりしなり。家康の儒教に倚頼したるは、其方法に於ても、必ずしも之を離す可らざるに似たり。○然れども宗教なき道德の、到底世を救ひ民を療し國を興し俗を振はすに足らざるあり。幕末の際、風紀壞敗して信用地に墮ち、武弁に武弁の氣なく、搢紳に搢紳の節なく、孰も商人町奴の風も化して、舉世皆女兒も化したるが如きもの、即ち宗教なき道德の、其末路に於て國家に與ふる弊失の好適例を示したる者と謂ふべし。貞享元祿の以前に在りては、儒教の本領の、最モ高尚に會得せられ、其俗も

勇健よして敢爲の氣に富みしが、而も人性の薄弱なる、常に勇敢壯烈の氣を保つ者よ非ざれば、一旦其墮落するに當りては、往々潰裂四出、匡救よ由なきとあり。幕末の弊の儒教的道德の其弱點を露出したる者にや。世よ宗教なき道德の得失利害を論ずる者あれど、此の如きの無用の推究なり。去りて幕末の風俗を見れば、以て宗教なき道德が、其末勢に當りては、何等の慘境に陥り、悲景を呈する者なるやを知るに餘りあるべし。

○此を以て徳川氏の儒教を以て興り儒教を以て亡びたる者なり。其盛も儒教之を致せしかど其衰も儒教之を致しけるなり。或は水戸光國、頼山陽の著書、及び高山彦九郎等勤王の志業を以て幕府滅亡の端を啓きたりと唱ふるも、此の如きの未だ悉さざる者あるべし。幕府をして亡滅潰決を免れざらしめたる敗風頹俗の儒教主義教育の流弊之を然らしめたるなり。山陽等の著書も其効なきに非ざりしも、

此の如きの外よりして忠亮慷慨の氣を激せしも、敗風頹俗の其内よりして已よ衰敝救ふ可らざるに陥らしめたるなり。宗教的超自然の秘義を含まざる、即ち所謂現世的道德としては是皆免るべからざる因果なりしならん。徳川氏の責にあらざるも、以て浩嘆すべきなり。

○徳川氏已よ儒教を以て敗れたりとせば、其後を承けて回天の偉業を奏せんとしたる維新の政治家の必ず儒教を排して代ふるに他の宗教を以てすべし。加之、其敗風頹俗の、儒教の現世的道德こそ、之を誘致したる主因なるべければ、須く超自然的秘義を有する宗教を以て之に代はらしむべし。而るに已むを得ざる勢となりしと云へ、維新の士の●●を以て之よ代はらしめんとし、現世的道德の弊を救ふよ更よ現世的仰慕の心を以てせんとせり。後其不可あるを見るに及んで、即ち神道を以て之に代はらしめんとせり。然れども神道も

亦真正の宗教に非ざるなり。其人心に慰藉を與へ、現在の苦痛の境より逸して、清高脱俗の天を望み、光明の希望を抱きて、欣々焉將來を樂み、窮通死生を度外に置かしむ能はざるは、●●の能はざると相同じ。此を以て●●中心より生ずる宗教的不満の心の、神道を以てするも之を防ぐ能はず。其不満なるもの依然として遺れるれば、儒教に代はらしめたる●●の功德の、未だ大に人心に徹するに至らずして、不満の念今も猶昔の如し。

○サレド此の如くにしての維新の士の、幕府の執權者に對すべき面目を有せざるあり。必ず新宗教を興へて國民の渴仰を慰むべき責任を有しければ、力索百方にして、終に往昔の佛教を喚び起して之を風教の柄を掌らしむるに至れり。其佛教たる徳川氏すら之を遺棄したるはとなれば、之を迎ふるに多少遲疑したらんも、此頃よりして基督教稍々國民の信仰を得けるに、其性質の未だ世上に明ならず

して、廟堂の有司の之を誤解すると深かりしかば、其誤解の念之を外より迫り、之を内にして佛教の跡を我社會に晦ましてより已に四百年(足利氏末路より)其後の冥暗の間に勢力を揮へりしも、時の政權者も信頼せられ、公然高きに據りて呼號したるとあらず、隨ひて其流毒も社會の之を記するもの多からざるの理由より之を喚び起せるが如し。若し佛教にして此時に於て一段の活氣を振ひ、一番死活の術を試みしならば、又我國民の信用を得て往年の勢力を復するに、必ずしも難事に非ざりしならん。

○然れども佛教僧の固陋自ら甘んじ、時勢の變を知らずして兼て自家の位地に明ならざる、依然千年以前の教説を把て、關進したる今日の人民に加へんとせしかば、其教説する所一も時勢の要望に適せずして、却て其嘲笑を招き、罵辱を受け、往々怨恨失望の情を激して其信仰を失ひしむるに及び、廟堂の有司の、之をも安んずる能は

すして、終りの其初メ反抗して疾視したる儒教をすら起たしめて、以て國民の志望を繋ぎ、其解体を防がんとせり。得失の論の之を後段に譲り、此に於て之を省るに、維新の政治家も宗教の一事に至ての寧ろ其信念薄弱にして一定せず、頗り善後の策を求めて之を得ざるの餘り、幾何か狼狽の態を生じたるを見るべし。千古の豪傑にも似合はざる處置と謂ふべし。

○三教を併用したるすら已に耻づべき業なるに、而も其佛教の四百年前より根底を失ひて三百年前より排斥せられ、其儒教の幕末の際に破綻を生じて太打撃を加へられたる者なるを思へば、更し維新政治家の無學不術、陋むべく笑ふべきを見ずや。但し佛教の衰へたりと雖も宗教の体を具ふる者なれば稍可なり。宗教の体を具へざればこそ幕末の失体を生じたる儒教を喚び起すとの何事ぞや。維新の政變が幕末無宗教の結果に起りたるを以て、助かすべからざる事實ありと

論定せば、宗教の体を具へざる儒教の、一步たりとも明治の宗教界に投せしむべからざるなり。此點に於ては其敗過の有無を檢するに違わらず、假令敗過なかりしとも其性質之よ合はざれば之に入らしむ可らず。況して幕末の如く敗過四出、其弊救ふべからざりしものよ於ては、殊も其然るを見るなり。而るを維新の有司の之をすら念及せず、輕々よ迎へ入れけり。ア、是何たる事ぞや。

○カレバとて之を深論するも要なきなり。三教の擢用せられたる源よ遡れば、是●●●を以て宗教上の中府と認めたるより脱化し來れるあり。夫れ已に●●●の敗風頽俗よ反抗すれば、其志士たらん者の國民の●望する所安くに在るやを知らざるの理あるべからず。之を知りて而して●●●中心説を唱ふ、即ち其所謂宗教的觀念の純駁精粗を知るべし。此觀念を以て宗教を撰擇せば、其針路の茫洋不定、東に傾き西よ斜カギくの故をも察すべきよ非ずや。抑々又其儒教が宗教な

るや神道が宗教なるやの道理を味ひざる故をも察知するに難からず。切に之を言へば維新の功臣の宗教の何たるを知らざりしよ、過て宗教的變遷の期に投じ、無學の識を以て無謀の策を運しけるなり。其肯綮を得ざりしに異ひあし。幸よ今日あるを得たるの多とするよ足るも、然も國民鬱勃の要望を如何せんや。

○此を以て明治の社會の、前よも言へる如く、其道德的信條の定まらずして、國民の信仰の合期せず、風教壞敗して、紀綱地に墮ち、朋友相疑ひ、兄弟相猜み、夫婦相親まず、父子相保たず、混沌矇矓、天地を擧げて煙霧の中に鎖し、光明なく、理想なく、希望なく、安慰なく、攘々營々、惟利あるを知るのみ、額に汗して相衣食するを知るのみ、否、額に汗するの勞をも厭ひ、袖手晏坐、他人の勞々辛苦するを視て之を嘲りて迂と爲し、而して其間に乗じて、其蓄積を奪ひ、以て自ヲ逞くするを知るのみ。現在主義か、尙金主義か、知

らざるも、互に相戒心疑懼し、廣大の宇宙を縮めて蝸盧の如くよし、偏執、固必、獨り自ラ索寞に陥れり、其状況たる殆ど青蛙の井に在るにも似て、天を仰ぎて睨々する所のもの、皆虛構、架空、褊小、促迫なるを見る。惜むべきの至りかな。維新改革の大志望の煙霧は歸せんとするや偶然の故に非ず。謂ふ勿れ、明治以降社會の事物の日に改良を加へて國運年々昌盛に向へりと。治世の精神は於ての著者の徳川氏に推服して明治政府に満たざる者なり。

○マトへ宗教あらざる儒教を、宗教を以て之を視たるの、徳川氏の過ちなりとするも、而も●●を以て宗教の權化の如く思惟するよ孰れぞ。之にも安住する能はずして、又佛教を迎へ、儒教に頼り、東西に轉輾して自ラ奔命よ疲るゝの、徳川氏の執一動かす、寂然として聲なく、滿目の群議を排して、措心殊に堅固なりしよ孰れぞ。誰も彼も徳川氏に左祖して明治政府は阿附せざるべきの、之を問はず

して之を知るべし。實に徳川氏の之を以て三百年の昇平を維持しけるよ、明治政府の未ダ三十年あらずして、早くも露々たる衆議に支へられ、群疑滿腹、左りする能はず、右する能はず、數十の頭顱、相抱持して長嘆大息するに至れり。家康をして之を視せしめば、或の其些末の事業に拘りて、治國の大計を忘れ、目前の計に汲々たるのみ、百年の長策一も見るに足る者なきを憫笑せん。而して明治の風教を此極に陥らしめたるの其責自ら歸する所あらん。

○但シ是只明治政治家の患なり。國民全体の患も非ざるなり。國民の聰慧なる、曾て幕末に當り、其敗風頽俗の國家を經紀する所以の道も非ざるを見るや、即ち慨然遂起して明治維新社會改造の端を成せり。假令中道にして振はず、今日已に此窮途も在りと雖も、未ダ初一念を放抛せざるからに、固より今日の凌辱に甘すべきに非ず。必す當に慨然として大義を唱へ、我邦の風教を將に頽れんとするよ

回復する者あるべし。徳川家康も獨り其智畧を前に擢にして、明治政治家の小襟局量を笑ふを得ざるべし。國民の又必す初一念を繼ぎて其敗風頽俗を改良し、斯民をして剛健朴茂の素に還らしめ、斯國をして泰山の安きに居らしむべきなり。而る時に宗教の選定目下の急務なるを見る。此よ於てか第二維新あり。

第六 第二維新

○第二維新の必要の前來の論旨よて畧ぼ知るを得べきか、其發動の根底の風教道德上の革新に在るべく、若し風教道德上の革新を除かば、第二維新の以て之あるを得べからざるなり。而るに近時の第二維新を絶叫する者の曰く、官紀紊亂して紀綱振はず、顯官高門の士の其權要の地に居り、樞機に干るを利用して、商賈の輩と通謀し、私利を營み、兼て僥倖の風を長じて商界の信用を攪亂せり。加之、

大事あれバ 衰龍の御衣の下に隠れて責を負はず、憲法の本旨を蹂躪する舉動を爲して、尚ホ臣責を明にし引退するを知らず。外人の退讓の主義を以て交り、其過舉を咎め非道を戒むる能はず條約上當然の權利をさへ放棄せり。此を以て國權の萎屈又言ふべからず、家國を擧げて外人の脅迫に從ひ其奔命に疲れんとす、最モ國を保ツ所以の道に非ざるなりと。マ、風教上より立論したる點之なきは非ざるも其多分の政治上の立論なると知るを得べし。

○就て救治の道を求むれば則チ曰く、責任内閣を設立して立憲の大義を明よせん。自守的外交の主義を確立し其崇外自屈の陋風を破らん。言論を自由にし廣く人材を招きて其情實の弊を洗ひ、藩閥割據の風を改めん。實に天下の天下の天下にして、上御一人の天下に非ず、況して薩長二藩閥の之を占有するを許すべからず。而るも其之を占有して威福を擅にするものは第二維新の必要ある所以にして、

改革の手は先づ此より下さいるべからずと。此に至りて第二維新の全く政治上の問題と爲り了れり、政治革新の外他の義を含まざる乾燥無味の問題と爲り了れり。

○手短に其迷ひを辨せんがため、其疑難の點より解刀を下さんに、改良進歩が人生の一大原則なるから、何れも今日を以て足れりとすべからざる、其先天的責務なるべきも。サレバとて何の術を以て今日の政治を改良すべきや。何人を擧げて之に代りらしむれば十全なる發達を遂ぐべきや。此問の現今の政治組織を不満なりと唱ふる政治家諸君こそ解釋せらるべきなるが、諸君の答の如何ぞや。虚心にして之を考ふれば、僅々二三十年の間に、今日の改良進歩を促したるの千古の盛事なり。其政治組織の如き、今日の人文の狀態に在りては、稍十全に近き者なり。元勳諸老が屢々之を以て難者よ答ふるも強チ謂ひれなきは非ず。此上の進歩を現政府に責め、而し

て其効擧らざるためよ、之を攻撃して餘力を存せざるの、或ハ難きを人に責むる者に非ずや。或ハ圃を得て獨を望む者も非ずや。進取の心の際限なかるべきを要するも、己れ其實施の經綸も疎くして徒に囂々喧々たるの欲深き人間の本性見へて淺間しとも淺間し。

○サヲバ、否とよ、現時の政治的組織も不滿の點あればこそ喧々囂々たるなり。決して伊藤井上の面の憎さに群起したるも非じと弁する者あらん。就て其政治的改良の方針を聞けば、曰く、選舉權を擴張して所謂普通選舉の制を行へん。帝國大學を獨立せしめ政府の爪牙をして之も達せざらしめん。北海道議會を設立して其自治を奨励し、愛國義勇の志を養へん。府縣制を改良し府縣知事を公選し以て人民をして眞正自治自由の民たるを得せしめん。地價修正を斷行せん。地租輕減を斷行せん。是も亦一理あり、此等のもの一々も改良せられなば、之あるの之なきも勝れり。又且ツ國民の智識を増し

第二維新と基督敎

第二維新と基督敎

其昌福を進むるも於て少補なきに非ざらん。然れども是方法手段の末のみ。半歲暮月よして爲すを得べき少小の事業のみ、殊更も第二維新を喚び起して多少の難を構ふるも及ばざるなり。是しきの改良のため一々維新の風雲を捲き起して、國家の常に些事末俗に動搖せられ、一定の針路を守り、進善の途よ上るを得べからじ。

○但シ此等のものも皆當に改良を加ふべきなり。決して一邊に棄置すべからざれば、其望みのマ、も第二維新を喚び起して之を改良せりと爲さんよ、之にて足れりと爲すか、尙ホ足らじと爲すかの疑問ハ此に於ても生ずべし。餘事ハ之を●●で、先ツ政治改良論者に問ふべきハ、諸制度の改良の望みの如くありしとして、サテ爲政者の心の依然今日の陋態に在り、一身の利害を謀るも急よして一國公共の大責を思はず、利益の乗すべきあれば、身の官職も在るをも忘れて、之を攫取せんとし、奸計邪謀、之を運らして飽くなく、其放縱

第二維新と基督教

亂暴なる切齒に堪へざるに、上已も此の如くなれば、下の之も化するの置郵して命を傳ふるよりも早く、賭博盛行して淫猥の風一世を動かし、民皆勤勞を厭ひて奢侈も耽り遊惰を事とし、加ふるに人倫の大義沈淪して振ひず、其亡びざるに一線の縷の如き者あらば、尚ホ可なるか、尚ホ不可なるか。是にても第二維新の功の完しと爲すか、マサカも然りとの答へられざるべし。サラバ否よと頭を掉るの人の此に於て熟思せらるべし。現時の政治組織の中よの甘心するを得ざるもの極めて多きも、其執政者よして、心を用ゐると眞摯にして、愛民の志深く、身を以て國よ供し、始終一貫、誠意を以て諸般の事務を經營せば如何と。前の問にの頭を掉りたる人も、其れならバマツ可しと首肯せん。

○此も知るべし今日の問題の政治組織の上よ在らずして風教道德の革新よ外ならざることを。風教道德の革新にして其功を竣へなば、地

第二維新と基督教

租輕減地價修正の斷行せられず、帝國大學の獨立せられず、府縣の自治の公認せられず、北海道議會の設立せられず、普通選舉權さへ擴張せられざるも尚ホ忍ぶべからんよ、風教道德の革新にして其功を奏せずんば、此等の諸制度の改良せらるよとも、得て忍ぶべからざるなり。流石に我國民も輕重本末の別を知るものにや。道德を以て重しと爲し、事業を以て輕しと爲し、精神を以て本と爲し、物質を以て末と爲せり。是治國の要道を知り、人類の本領を解する者あるよ、何の惡魔か此國民を殲滅するを得んや。

○第二維新の此目的を抱きて起れり。サレバ第二維新をして以上の目的を達せしむると今人の責任なるべし。其目的の之を再言するを要せざるも、今日の佻巧華麗の風俗を剛健朴茂の風俗に醇化せしむるに在り。若し之をして此に到る能はざらしめば、第二維新の目的の達するを得ざるなり。其初第一維新の同く以上の目的より喚起さ

れしよ、當局の士深く之を顧念せざりしかば、皇室に依頼し、神道
 佛教儒教に依頼して一大耻辱を遺し、社會をして混亂攪迷せしめ
 り。之を思へば今よりして第二維新に入らんとする者の、當に深く
 戒心すべきあり。若し然らずば或の案外なる方向に迷ひ出で、進
 んだまれば、退くも退かれず、非常の難苦を嘗めて、第一維新が明
 治社會に與へたるよりも甚しき混亂攪迷を醸すとあらん。

○現よ之を轉旋する民間政治家の之を以て單純なる政治問題と爲し、
 現政府攻撃を以て主一の目的と爲せるの、恰モ幕末の浪士が幕府攻
 撃を以て主一の目的となし、其本領主義の其外に在るを忘れたるが
 如くなるを見ずや。幕府の攻撃の誤りにあらざりければ、民間政治
 家の政府攻撃に熱中するの、以て病と爲すも足らざるも、若し政府
 攻撃の外、他あるを知らず、其本來の至大至剛の目的を遺忘せば、
 現政府を覆滅したりとて何の効ぞや。殷鑑の幕末も在り、必す之を

戒むべし。又しても第二維新をして第一維新の轍を踏み、其過ちを
 再びせしむべからざるなり。

○サリ乍ら第二維新を果して風教道德上の必要より叫破せられたる
 問題ありとせば、之が柄を現在の無主義無節操なる政治家の手よ托
 し、糊塗亂處せしむるも遺憾の至りならずや。悪よの惡を以て克つ
 べからず只能く善を以て之よ克つを得べきに、今日の政府よりも甚
 しき腐敗の空氣中に在る者を以て、今日の政府を責めんとするの、
 分を知らざるの甚しき者よ非ずや。若し夫れ情實の纏綿の政黨員の
 間にも之あり。藩閥の割據の新聞社の中よも之あり。老朽者威福を
 擅にして青年少壯の士求むる所を得ざるの民間到る處是なり。一身
 の營利よ急よして國家の大事を忘るゝの、政黨同志の間よ於て殊よ
 甚しきを見る。主義を忘れ利害よ殉じ、成敗の外正義の在るあるを
 知らず。其信任する所を二三よして終始獨一なる能はざるの、是必

不しも獨り政府員の病よあらざるあり。飲食の欲よ溺れ、不義の樂
みを貪り、賭博を好んで信約を破り、骨牌を弄し待合に出入し、不
徳不義、姦淫苟合なるよ至て、ア、誰か之を以て民間有志家の病
と爲さざらんや。民間有志家身自ラ此病あり、以て第二維新の衝に
當らしむべきか、當らしむべからざるかの、多言を要せずして明な
らん。

○然るよ民間政治家の躍然として此衝よ當りたり、之をして此衝に
當らしめたるを誰の過ちと爲すや。著者の之を以て宗教家起たざる
の過ちよ歸せんと欲す。夫れ已よ風教道德の革新ならば、是正よ適
當なる宗教家の問題あり。此際に當りての宗教家の當り天下に卒先
して起ち、其抱持する所を述べて、其説を行ふを期すべきなり。此
に至りてだに起つ能はざる宗教家にして豈能く何事をか爲すべけん
や。而るよ宗教家の起たざるなり。其無氣力の以て嘲笑すべし。而

第二維新と基督教

も革新の機は已よ熟しけるより。到底傍觀して無事を粧ふべきよ非
ざれば、政治家の起てり。其職掌以外の事の之を與り知らずとして、
專ラ其職掌上の政治よ就き、現政府の欠點を衝き、非學を責め、以
て股々たる國民の希望を己れに引き、之を以て滿心の覇圖を達せん
とせり。其心術の陋むべきも、國民の希望をそらさずして、之を以
て自家の彈丸に充て、政府を奪はんとするの、其巧譎こそ愛すべき
なり。

○此を以て民間政治家の爲すべからざるに爲したる過ちあり。宗教
家の爲すべきよ爲さざる過ちあり。現時の政府の第一維新の精神を
忘れ、宏業を失墜せんとするの過ちあり。其過ちたる極めて大なる
も、是將々勢の己むを得ざるよ出で、酷咎すべからず。寧ろ宗教家
の黙々として聲なく、今日の危勢を醸成して顧ざるの過ちを以て第
一とせん。其影響する所實よ少小に非ざるなり。之よ比すれば民間

政治家僭越の過ちの如きの殆ど言ふにも足らざるなり。今日の禍亂たる其原因多しと雖も宗教振のざるもの其主因なり。而るも宗教家あり之を矯正して振作する能はず、又且手を袖にして傍觀し、終る權勢の兒なる在朝政治家と、野心も満ちたる民間政治家とをして相抗争反目せしむ。社會の是等の毒氣に圍繞せられ、今ぞ正も朦々漠々の中より在り。

○此に於て怪むべきの佛教、儒教、神道の如き、平生宗教家としての權勢を好みがちある面々が、此際に手を擧げず足を投せず、全く見ず知らざるの間に過ぎんとするとなり。是其性來も不似合なれば、深く怪むべきが如くなるも、サテハ其歴史を查明すれば、到底自ら其爲すなきを悟りて然るにや。以上の三教たる、從來一度ならず二度ならず、我在上者の倚頼する所と爲り、以て風教の木鐸と爲りたるもの也。而して其度々敗過を呈し、現在今日の風教の敗類も亦自

ら其監督を怠りたるに胚胎すれば、之を思へば彼徒の剛情を以てするも、以て手を擧げ足を投するも由なきか。三教已も然りとせば剩す所の宗教の獨り基督教あるのみ。然らば基督教の今日も於て呼號挺進して其伎倆を試み其任務を果すべき責任ある者も非ずや。而して之を怠りたればこそ民間政治家の間も乗じて跳り出でたるあり。是をや基督教家の落度と謂ふべけん。

○讀者の煩癖を厭はれんも、尙一例を以て明治社會が如何ばかり風教問題も熱心なるやの証左を擧ぐべし。嘗て星亨悖德の問題ありしが其慨切痛烈なる帝國議會ありて以來初めて見たる所とす。星亨も完人に非ざれば悖德の行爲の之ありしならんも、サレバとて現在の政治家に悖德の行爲あきものを誰と誰なりと爲すや。多くの腐醜汚劣の人のみよして其行爲の清廉なるの僅々五指を屈するに過ぎず、不徳悖行の人を以て他の悖德非行を攻むべきも非ず。自由黨の實も

第二維新と基督教

之を以て有りがちの事實なりと心得、不要緊の問題なりと解しけるに、一旦議場に入られて、則チ千丈の氣候を激成して朝野の耳目を驚倒し、延て累を自由黨にまで及ぼし、自由黨の威名も一朝にして地に墮ちんとするに至れり。是議院の之を然らしめたるに非ず、社會之を然らしめたるなり。社會の他の悖德汚行を知らざればこそ之を寛假するなり。一たび之を陰暗の中より拙き、社會の公道に照せば、社會の最早之を默視する能はず、必ズ之に嚴正の判断を下し、之を窮地に置かざれば休せざるなり。星亨の隣むべきかな、社會の至大至剛の怒りも觸れて其地位を失へり。

○但シ他人の悖德汚行を難する者の自ヲ省みて清廉潔白、糸毫の斑点だに疵きを要するも、他の代議士等も未ダ社會に知られざるを幸とするのみ、其悖德汚行星亨よりも甚しき者ありければ、流石に其良心よての慚愧も堪へざりけん、星亨を懲罰せんと欲して中心安ん

第二維新と基督教

せず幾回か週疑逡巡したりしぞや。此を以て其勇氣尙ホ熾盛なる能はずして、勇往邁進の氣を欠けり。恨むべきの事ながら、身に悖德汚行の嫌ある者よては是亦已むを得ざるなり。若し正義慈仁の宗教家を以て之に當らしめば其痛慨壯烈、蓋シ前日の觀に止まらざりしならん。而も宗教家なればとて此に當るを得る者の誰ぞや。神道か、佛教か、儒教か、是亦多く擇ぶ所なし。大抵改進黨國民協會等の星亨を攻撃せしと相同からんのみ。此に於てか基督教あり、基督教徒よして當時に在らば、其勢力の及ぶ所測り知られざりしならん。或の一舉よして我風教界を震動するを得たるやも知れず。

○ア、是一例あり、而も亦以て基督教徒が今當る起つべきの時なることを証すべし。基督教徒の今に於て宜く起らあがり其忠亮眞摯の氣を吐くべきあり。第二維新の自家當然の責任なることを思ひ、神道、佛教、儒教も厭きたる我社會の、將よ手を舉げて基督教を壓かんと

せるを思ひ、猛然奮進、其大責を全くすべきなり。

○今日よ於て第二維新の期を問ふの要なきなり。第二維新の政治上の革新を意義するよ非ざれば、其政治的組織の革新せられたるの未マ其終りよあらず。必ズ其主眼とする風教道德の革新せらるゝ迄の當よ永續すべし。第一維新に於る我國民の意衷の、其風教道德の進善を希ひ、政治組織の如きの、殆ト介意する所に非ざりしよ、維新政治家の短見ある、其政治組織を改良したるのみにて、其風教道德を重要視せざりしかば、第二維新の必然よ叫破されて今日の混雜を招けり。之を推せば將來も亦知るべきのみ。第二維新の政治家よして、若し第一維新の政治家の如く、其政治組織を改良するよ止まり、其風教道德を進善せざれば、久しからずして國民の又第三維新を要望せん。第三維新よても其要望を達せざれば又第四維新を要望せん。而して此要望の心潰へざるの間ハ我國民の元氣も以て頼むべきなり。

第二維新と基督教

若し其要望の心潰へなば、國家ハ亡滅せずして何をか待たん。風紀廢壞して國安きもの古來之あらざるなり。今日よ於て第二維新の期限を問ふが如きの無要と謂ふべし。當に蹶起して一日たりとも早く其使命を盡すべきのみ。

○或ハ第二維新が民間政治家よ叫破され、民軍の勢力年を逐ふて加へり、藩閥内閣没落の期遠きに在らざるべきを以て、第二維新此時よ成ると思ひされよ。世豈形式の進歩を以て能事と爲し、精神の發達修養を以て度外に舍く者あらんや。況や第二維新絶叫者の唱ふる所の如きの、只形式上の推移よ屬し、未マ進歩を以てさへ目すべからざるをや。宗教家の起つあり、國民の要望に應じ、國家の缺陷を充たすに非ずんば、維新の事業ハ終よ就るべからざるなり。望むらくハ第二維新の事業をして單に民間政治家の野心を充たすよ止まらざらしめよ。政治組織の變更よ止まらざらしめよ。物質的進歩よ止

第二維新と基督教

多數人民の生死、利害、窮通、休戚を負ふ者なるを以て、當り他萬人の益を爲す心得にて業務に従ふべし。而るに其然るを欲せば、宗教を信する者も從ひしむるも非ざれば不可なり。宗教信者の其行爲温良にして心を用うる周到親切あれば、他の患難にも同情を表すべく、自家の品格体面を守るにも篤實至誠にして、能く誠心誠意もて一貫するを得べきも、不信者の此等忠良篤厚の美俗を欠げば、大事を担当せしむるも足らず。大臣宰相の如き、一身もて數千萬蒼生の利害の柄を握り、双肩も國家の盛衰を負へるもの、殊も其親切の心を要すべきを以て、此等の大責に當る者の必ず宗教信者からしむるを要すと。此意の著者も亦之も歸服するも難からず。却て其思慮の温厚にして愛民愛國の赤誠、蔽ひんと欲して掩ふべからざるを見るなり、益々嘆美の情を加ふ。

○想ふも宗教を信せざる害如何と問ふ者あらば、専門の宗教家こそ

喜んで其解答を下すべきを以て、著者の喙を此間に容れざらんも、暫く世間の利達功名の念を去り、虚心もて天地の素も反り、其良心に問へば必ず釋然として解悟するを得べし。人生主義をくして立たずとせば、主義との何なるか、主義の由て生ずる良心との何なるか、良心の由て安んずる宗教との何なるか、是等のもの皆明瞭に歸すべし。而も主義をくば人生に處するを得ざるなり、主義の宗教の授くる所なりとせば、宗教なき害も以て懼るべきも非ずや。宗教を信せざる人の、其信念固からずして、東西も漂依し、反覆自在、殊も醜穢を極むる者なり。

○國も亦此の如かるべし。宗教盛なれば興り宗教衰ふれば亡ぶ。未だ宗教心衰へて興りたる國のあらず、未だ宗教心盛にして亡びたる國のあらず。其興るも宗教の餘慶なり、其衰ふるも宗教の餘殃なり。基督曰くもし芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れと命と

も必ず移らん又爾曹も能はざるとなかるべしと、實に信仰の山をも平地と爲し、海をも坦途と爲す者なり。此信念あり爲すべからざるの事なく、更に此信念なくして爲すべきの事なし。グ氏が治國の臣に必ず宗教信者を以てせんと論するも決して誣妄の談に非ず。一々其國名を語らずとも、宗教の盛衰より興亡の機を決したる邦國の天下は多し。看よ、何の國か宗教心なくして興りたる者ありや。

○或の僧侶の酒を飲み妓を狎れ、品行劣悪、俗人と選ぶ所なきを以て、宗教家も亦此事あるを免れず、果して宗教の力を至大至剛、物として抗すべき無しとせば、宗教の勢力の必ず先づ僧侶の身は彰れ、僧侶の献身よして至誠、忠實よして温厚、慈仁よして敬虔なるべきよと論する者あり。是難きを以て人よ責め、又人間の性情を解せざる者とや謂はん。主よ主よと呼ぶもの必ず天國に入るよあらずと云へば、僧藉に在る者の悉く品行嚴正ならざるも、往々之あるべ

く、殊に人情ある者の屢々自ら過ちて不測の罪を犯すを免れざるなり。カレド同く罪過を犯しても、宗教を信せざるものと、信じたる者の間よの、懸隔あり、解悟の遲速あり、宗教を信じたる者の一旦驟然として解悟するも當りて、其行爲の毅然、慨然、快然たるが如きは、到底不信者の中に見るべからざる所とす。著しき差別の患難窮乏は漸したる時よ在るべし。宗教の信者の此時にも狼狽の態を示さず、泰然命よ安んじて自若たり、心を現在の窮苦より離して、未來を望み、天の理法を信じ、精神を勵まして徳を建て操節を敗らじとするも、不信者よ至ては此温厚深沈の擧ある能はざるなり。

○カレバ一家の中若し一人の宗教信者あれば其家庭の幸福なり。一郷の中若し十人の宗教信者あれば其郷黨の平安なり。更にグ氏の説に従ひ、其郷黨にして悉く宗教信者のみならば、互ひに道を譲り畔を争はず、穆々たる光景の人をして極樂に遊ぶの感あらしめん。其

樂みや測るべからず。一家も亦此の如し。家庭一同宗教信者のみならず、家庭の清福之に加ふべからざるなり。已に此に至らば其信仰の牢として奪ふべからず、其決心の堅きと磐石の如く得て動かすべからざらん。是徳川氏が切支端邪宗門の禁止札を建てたるに拘らず、所在歸依の徒、確乎として動かさず、妻兒を奪ひ、交通を禁じ、家屋を火せられて悔ひざりし所以なり。明治の初年、數百千の信徒が、新政府のために捕獲せられ流斬せられて、具に人生の苦難を嘗めながら、尙ホ改めず、監禁の太守をして其篤信に驚かしめたる所以なり。己に此信仰と決心あり、何を爲してか成らざらんや。之を推して國家に及さば、宗教の盛衰の國家の興亡に關係あるの理、察して火を見るよりも明ならん。

○ア、宗教を信せざるはと憐むべきの人ならざるあり。其人の未來を有せず、希望を有せざれば、患難に際しても天來の慰藉者の腕

に擁せられ、窮通、榮辱を彼蒼に一任して吾心を攪亂せざらしむる能はず。總て現在を以て其孤柱と爲し、自己を以て其全能者と爲すが故に、不品行も戒むるに足らず、朋友の難を救ふにも及ばず、金錢さへあれば世の安樂榮耀の淨土なりとして獨り放蕩三昧を耽るなり。宗教盛ならざる國家も亦此の如し。國の最も卑むべきの概するに此種の國ならん。未來なく、希望なく、隨ひて理想もなく、皆今日現在を目的として空々無念なれば、其政治家の如きも、自家統督の部内は賄賂の公行するも抑止せず、官組の紊亂するも戒飭せず、其成りに行に放し置きて、一旦危難の身も迫るともあれば、即ち身先ツ逃れ去り、後人の修理の道も迷ふを見て、却て笑罵戯嘘し、自家の多年の間、窮乏を冒されず、人生の榮華を極め、兼て子孫の爲めに田を買ひ得たるを誇りと爲すらん、固より此種の政治家にして、自家の不用意に貽貽する失策敗過の後人の累を爲すを恐み、發憤し

て澄清せんとするが如きの有るべからざるの理なり。不親切とも何とも謂はん方ぞなし。

○幸に宗教を信する人の、未來あり、希望あり、營々たる人生の得失の外も、天來の理法あり、光明あれば、一面よ其恩化に浴し、一面に其責任を恐れ、右手よ神の御袖に縋りて、左手よ世間の事業に従ふを以て、失望なく、苦惱なく、晏如として世よ立つを得るあり。國家も亦此の如し。宗教を信するに至れば、必す其行爲にして責任あり、希望あり、一定の主義ありて飄搖せざるに至らん。而して翁の言ふ如く、天下萬民の休戚を一身に負ふものから、常に其大責を完くせざらんことを懼れ、朝々夜々、神よ祈禱して、自ら神意を承け得て、其任務を奉せんとするべく、其心の温厚よして其志の誠實なる、天下の靡然として其德に化すべき也。明治政府今日の弊患の如き、要するよ宗教を信せざることを其病なるべく、若し一人

の宗教を信する賢宰相あらば、國務の更よ一段の光輝を放ち、紛々たる非難攻撃の忽然として其影を収めん。

○故西郷翁の遺訓を見ずや曰く、

廟堂に立て政を爲すの天道を行ふ者なれば私を挾みての濟まぬ者なり心を公平に採り正道を踏み廣く賢人を選擧し能く其職に任ずる者を擧げて政柄を執らしむるの則ち天意あり其れ故眞よ賢人と認むる以上の直よ我官職を讓る程ならでの叶ぬ者ぞ故に何程國家に勳勞ありとも其職よ任へぬ人を官職を以て賞するの善からぬ事の第一あり官の其人を選びて之を授け功ある者に俸祿を以て之を賞し之を愛し置く者ぞと申さるゝに付然らば尙書仲虺の誥よ德懋チカなる者の官を懋チカよし、功懋チカなる者の賞を懋チカよすると之あり徳と官を相配し功と賞と相對するの此儀にて候ひしやと請問ひしよ翁欣然として其通りぞと申されき

○流石に近代の豪傑とや謂ふべけん。其言肺腑より出で、鑿々として根柢あり。此を以て其朝に立つや、天下新政を仰ぎて風采を想望し、政令一致、民其恵に頼り、第一維新の目的將に遂げられんとせしかば、遺徳今に至るまで國民の思慕する所と爲れり。其一旦意見合はずして朝を去りたるの明治史を讀む者の恨事とする所あり。而も翁の生るゝや、國事倥偬の際に在りければ、讀書理を究むるの邊などあらざりしならんよ、其説く所古聖賢の旨にも合して、海を隔て、グ氏の説と東西一致、符節を合するが如きも奇なりと謂ふべし。豈大人の天意を体するを以て見る所期せずして相合したるか。西郷の今や已に故人と爲れり、グ翁壯なりと雖ども又已に政界を退けり。二人を我廟堂の上に迎へて其眞摯多情の政治を行ふを見んと欲するも得べからず、悲哉。

○基督曰くもし人全世界を得るとも其生命を失ひ、何の益あらんや

また人何を以て其生命に易んやと、宗教の國家の生命なり、之を忽よするの其生命を忽よするなり。未だ其生命を忽よして亡滅困蹶せざるのあらず。西郷木戸等の朝に在るや、聊か心を此に用ひざるよ非ざりしも、今や伊藤井上等其柄を握りて宗教的觀念の殆ど廟廊の中より去れり。社會の風紀日に汚下し就き、其國命の漸く將に迫らんとするが如きもの偶然に非ざるなり。顧るよグ翁の如きハ、其生命を宗教に得て、六十年の久しき英國の政界に馳騁せしが、英國の勢力が、ヴィクトリヤ治世五十年に於て、世界の隨一に位し、古今の絶盛を極めたりと稱せらるゝもの、其來る所遂くして遠しと謂ふべし。而して我國の如きハ政治家の宗教家を蔑視して與に語るを欲せず、宗教家も政治家を厭忌して之と伍するを耻ぢ、互に反目睽離せるもの長嘆の至りあり。安んぞ老雄グ翁の如きを得て、之を東海の濱に迎へて、其治國の大策を與かり聞くを得ん。

第八 基督教と日本

○願ふ基督教を日本風に化すべしと説く者あり。是之を要するとの意なるべし、若し佛教あり儒教あり以て大に用うるに足るとせば基督教の迎へざるも可あり、即ち又之を日本風に化するを要せざるなり。之を日本風に化せよとの、一圖は佛教儒教を以て已に用うるに足らずとの意を含めるか。佛教儒教のために吊すべきも、基督教のために好運慶すべきなり。國粹論勃興の勢とかに制せられて沮喪振はず、動もすれば生色なからんとする基督教界の先達有志の士は、少しく意氣を強くせらるべし。信者こそ四萬は足るか足らざる間なるも、世間よに已に儒佛二教の爲すなきを看破して、卿等よ由り我風教を扶植せんとする者頗る多きなり。サレド此徒の常として勢ヒを畏れて敢て發せず、勝敗を觀望して即ち日本風に化せよと

第二維新と基督教

説くなれば、卿等の何に由り基督教を日本風に化し、此徒の望みに應ふべきか。若し之を日本風に化する能はずんば、此徒の必すしも卿等の同志は非ざるべし。

○此問は對しての諸君の必す下の如く答ふるあるべし。此く迄に時勢を觀望して遲疑決せざる者の、一旦偶然の機會よ由り教會は投じ來るとも、其後少しく時勢の不利なるに逢へば卒然として影を隠し、又宗教々會の事を談せざる者あり、此徒現は今日の信徒中よも之あり、其病たる薄志弱行に在り、敵として畏るゝに足らず、味方として重んずるゝ足らざれば、之を迎ふるは基督教會の強きを加ふるにあらずして却て其弱きを爲す者あり、迎へざるこそ基督教會の利なり、若し夫れ眞に儒教の爲すなきを知り、宗教なき國家の衰亡を免れざる所以を知り、而して我國家今日の弊患を救ふて、之は活氣を與へ、東洋の義人國たらしむるを得るもの獨り基督教あり、基督教

第二維新と基督教

第二 維新と基督教

の我國に欠くべからざるの宗教たるを信せば、當に速に來り投すべし、世論の露々世情の嫉惡の如きの願ざるも可ならん、既に來り投するの後、尙ホ其弊患の前聞せる所と同じきものあらば、力を出だして之を排するも可なり、即チ之を日本風と化せんと欲せば自ラ亦此群中と在り、同志を集めて斡旋すべきのみ、然らずして徒に日本風と化せよと説くは信すべからざるなり、寧ろ不問に置くべしと。是亦一理あり、著者の此の如き答が正經ある基督信者の口より出づるを難する能はざるも、尙ホ考ふべきもの此に在るべきを覺ふ。

○何人にもあれ一旦宗教を信じたる者の眼より、未ダ宗教を信せざる者を視れば、皆薄志弱行の如く見ゆるなり。サレバ他の薄志弱行を難じて之を濟度せざれば、宗教の之を布及するを得ざるべし。必ず先ツ薄志弱行の人を迎へ、之をして堅信力行の人と化せしむる所よ、宗教の威靈の存するなり。薄志弱行を以て此徒を指斥するの

第二 維新と基督教

當らず更よ此徒の主張する所を聴くよ、此徒今物議を憚り慨然として來り投する能はざるにもせよ、我同胞の中は稍風教道德の何たるを解する者の必ず此徒なり。サレバ基督教會の隣りの誰なるやを考へよ、必ず又當よ此徒なるべし。基督の訓へに曰く爾の隣を愛せよと。此徒已に爾の隣たらば、基督教徒の以て此徒を愛せざるを得ざるべし。其多少の注文を爲し、小抗抵を爲すを以て之を冷殺すべからざるなり。若し夫れ諸君子の言ふ如く、此徒の薄志弱行なるを難じて、之を不問に置くにせば、却て其傳道會社を閉鎖して其十字の旗號を撤去するの勝れるは如かざるなり。

○此故よ基督教徒の宜く此徒の言ふ所を聴くべし。其中無理なるもあらん、無理ならざるもあらん、無理なるの之を辨説して其迷ひを解くべく、無理ならざるの之を以て他山の石と爲し吾玉を磨くべきあり。而も其徒の基督教を迎へんとするの希望の殷々たるに拘ら

す、多少之を陳外するの形跡あるの掩ふべからず、最も思議すべからざるなり。是何を以て然るぞや、一考せざる可らざるなり。第一の基督教の勢力を蔑視したるなるべし。第二の基督教の勢力を畏憚するあるべし。第三の人文發達の結果、唯物的、懷疑的傾向を長じて、其所行殊に放恣不羈なるより、宗教道德の事たる、其超妙なるを怪み、其嚴正なるを忌み、而して之を厭忌するあるべし、以下に於て其解説を試みる。

○想ふに其昔應仁の朝に儒教來り、欽明の朝に佛教來るや、我國民の之を迎ふるに於て多く逡巡せず、今日基督教徒に對するが如き薄遇非禮を爲さずして、殆ど渴者の水に就くが如き勢もて之に歸向し、絶へて外國の法衣を脱し、其習慣を排去せよ、日本風も化すべしとの六ヶしき希望を爲さざりき。甚しき其文字の讀法さへ唐音其マ、よ習ひ得て、移して一國の公文とさへ爲せしかば、當時の布

告布達の漢文を以て行われけり。其後菅原道真等の鴻儒碩學起りて、之を以て便ならずと爲し、日本風なる返シ讀み法を發明するに至りての、已に幾百の星霜を経たりしと爲す(儒教)。但し是すら其讀法の變じたるを謂ふのみ、其形式の依然傳來の姿にて存し、佛教の如きの我國風も化したりと謂はんよりの、其自家特殊の風儀を以て我國民を同化したり。是實に事實の著聞なる者、何人も之を以て然らずと謂はざるべし。

○然らば則ち此に於ての下の如き結論を爲すを得べし。曰く儒教佛教の其初め我國に入り來るや何等の阻止せらるゝ所なく、其固有の風儀を以て我國風を同化したるの其勢力の強大あるよ由るなり。今よ於て基督教の動もすれば薄遇無禮を受け、且つ先づ其法衣習慣を脱却せざれば入るべからずと強制せらるゝの、是其勢力を蔑視されたるなり。若し然らざれば、何の制限なくして儒教佛教を迎へ入れ

たる我國民が、獨り基督教に向て反抗の情を抱くもの解すべからず。此に知るべし儒教佛教の其勢力を以て無二無三と我邦土を征服して、一言ある能はざらしめしが、基督教の此の如くある能はざるの其勢力の佛教儒教に如かざる所以なりと。蓋し我國民の無理非道なる國民に非ざるあり。其性質の温良従順とや謂ふべし。其一例の佛教儒教を迎へたる際も於て之を見るべきなり。而るに今基督教を迎へんとするに於て、種々の注文を爲し苦情を鳴らすの其性情に不似合なる者なり。寧ろ之を以て基督教の勢力を蔑視し、かいしよなしの野呂作どん、明後日アサツテでされとピンとすねの論法より脱化し來れりと見ること、中道に近きが如し。性質の變化に非ず、來り售らんと欲する他の目的物の勢力の強弱に在り。

○以上の第一の場合あるも第二の場合の必すしも不可ならず、我國民の基督教を畏懼するの之を冷遇するよあらず、其勢力を承認した

るに外ならずとせば、是已に第一の地歩を占め得たるあり。敬すべき基督教よ、卿が成功の日を見る將に遠きに在らざらんとす。第三の場合も亦必すしも不可ならず。智識の進歩するよ従ひ、懷疑の精神を長じ、唯物的傾向に偏倚するの、人情の常なれば、若し我國民の基督教を厭忌するの、其學術的思辨力の進歩して、懷疑の精神を長じたるに在りとせば、是我人文藝術の爲に喜ぶべし、流石に十九世紀の文明に辜負せざる者なり。基督教の合理的宗教と曰へば、當よ其懷疑的情性を飽かしむるだけの、辨難攻撃を試みしめ、而る後に之よ投すべし。且つ其教の仁愛の旨義に充つと曰へば、須く他の畏懼の情を去り、之を愛慕すべき所以を知らしむべし。想ふに基督教の本質を究めて、敢て畏懼するを要せざるの理を知らしめ、且つ其教の妄誕荒唐ならず、真理に充ち正義に満ち、人倫相愛の意を開發して漏らすなきの實を証明し、世上の疑惑を解するの、基督教の

第八 基督教と日本
九十二
以て難事とする所に非ざらん。

○實に今日に於て我國民の基督教を迎ふるの其往昔に於て儒教佛教を迎へしが如く容易なるべからざるなり。鉛の微温の火を以て之を鎔かすべきも、金の積熱の火を加ふるに非ざれば之を鎔かすべからず。若し佛教を以て鉛と爲し、基督教を以て金なりとせば、我國民の之を迎ふる決心も又微温積熱の差あるを要す。鉛なればこそ微温の氣を以て之を迎へたらんも、果して金ならば之を火爐に加へ之を沈水に浸し、百方の檢案を加へて之を迎ふべきなり。即ち積熱の火ならでの叶はず。若し又佛教を迎へし如き容易の心を以て之を迎へば、又且つ容易の心を以て之を去てん。是憂ふべきなり。之を要するは、基督教佛教の性質よりして我國民が之を迎ふるより、豫め其胸中の覺悟に若干の差違あるべきなり。

○但し是只其宗教の性質に就て之を言ふのみ、之を迎へ入れんとす

る我國民の識力に就ても又宜く以上の差違を生ずべきなり。往昔の人文未だ開けざりしも今や人文已に開けたり。往昔の社會の習俗未だ定まらざりしも今や已に大に定まりたり。往昔の言語文章すら尙ホ不定の間に在りしも今や已に一定して動がすべからず。サレバ往昔の微弱ある勢力を以ても入るを得べかりしも、今の強大ある勢力を以てするに非ざれば入るを得べからざるなり。往昔の荒誕不稽の宗教にても入るを得べかりしも今の合理的純眞の宗教に非ざれば入るを得べからざるあり。往昔に於る佛教の阻礙を被らざりしも理あり、今日に於る基督教の阻礙を被るも理あらずや。若し今日の我國民が基督教を迎ふるに佛教儒教を迎へたるか如くにし、何等の檢案約束を加へずしてスラくと迎へ入れなば、ソハ我國民の温良忠直なるを証するに非ずして、却て其固陋、不明、因循、無智、時代後れの智識を有し、一片獨立の氣概を存せざるを証する者あり。

我國民の耻辱と謂ふべし。幸にして佛教儒教を迎へたる當年の如くならず、多少の檢案を加へ、約束を爲さんとするの、是我國民の智識未ダ大に陋劣ならざるを示すもの、基督教の光りを以て之に加ふれば、其一層の光彩を發して世界の強民たるを期して待つべし。基督教も此等の國民を教化してこそ始めて榮譽と謂つべし。

○此く言ひ、歐米諸國を見ずや、基督教日本を教化したるが故に其榮譽なりとせば、歐米諸國を教化せば其名譽の更に之よ加ふるなけん、而るに基督教の已に歐米諸國を教化したり、何ぞ日本國民を教化するを待ちて始めて榮譽ありとせんやと論せらるゝ客もあるべし。カレド深く之を思ひるべし、歐米の諸國民が基督教に歸依したるの恰も我國民が佛教に歸依したるが如きなり。其人民の野蠻の態を去る遠からず、其社會も未ダ整備せず、其人文も未ダ大に發達せざる頃なりき。カレバ基督教も皆迷謬の觀念未ダ敢せざる國民に信せら

れたる者あり。其初め已に迷謬の民に信せられしかば、其後の社會の習慣と爲り、遺傳と爲り、多くの檢案を加へずして一般の信仰を博すると爲れり。未ダ合理的國民に合理的檢案を経て信せられしよあらず。其合理的檢案を受け、合理的國民の信する所と爲るの將に日本より始まらんとするなり。日本の民の先天的遺傳の束縛なく壓抑なく、最モ光明正大の心を以て之を拒受するの自由を有する者なり。是に於て基督教能く日本に入るを得ば、始めて基督教の合理的宗教たることを証明する者よして、若し入るを得ずんば、其合理的空名たることを露す者あり。是基督教に於ても榮譽の分るゝ機とや謂ふべく、即ち其日本を教化するよ於ての榮譽極まりあしと曰ふ所以なり。

○日本已に基督教を承受せば、日本が世界に向て發揚すべき至大の責任此より生ずべし、ソハ基督教の体裁、組織、信仰よ一大革新を

第八 基督教と日本

九十六

與へ歐米諸國をして其餘光の恵みに浴せしむべきとなり。即ち真正の基督教をして其根底を日本に下し、健全なる發達を遂げ、炳麗なる美花を咲かしめ、外國をして仰慕嘆美の情、自然に相模倣して従前の陋習を打破せしむべきなり。實に日本の基督教に於るや、歐米諸國民の基督教に於るが如く、先天的遺傳あるに非ず、遺傳上の迷謬あるに非ず、抑制せらるべき義務あるに非ず、之を受くるに人間の至情に發して、天地の感應に由りて、毫も人為の彫琢を加へざる者なれば、其結果や至美にして、必ず天に聳へ地に蟠るべきなり。日本の基督教の必ず世界に罕なる美果を結び、偉大の功を奏し、世界を震蕩するの盛大を極むべし。是實に日本國民が基督教を迎へ入るに於て内外に向て爲さるべき使命の最モ重き者なり。日本にして此に當らずんば、更は何の國民か此重地に當り、歐米の天地を雍蔽せる基督教の迷信を排するを得んや。

○之を内にして基督教の日本に盡すべき使命の、儒教あり、佛教あり、神道あり、日本の風教を扶植し其道德を鞏固よせんためよ、歴代の政治家は彼此參用せられたりしも、皆其効を奏せず、日本の今正に無宗教の境に在り、敗風頽俗、悽涼の景目を蔽ひ、志士多恨の秋なれば、能く儒教佛教神道の到らんと欲して至る能はざりし欠點を補ひ、國民の宗教心を啓發し、之をして満足せしむるとなるべし。即ち其風教を扶植して亂離に至らしめず、道德を剛明して衰頽に至らざらしむるの、基督教の日本に負へる責任あるべし。蓋し日本國民の宗教に於るの心を用ひざりしに非ざるなり。不幸にして學びて精からず、擇んで其當を得ず、迎へし者もく、皆成功を告ぐるに至らずして、往々其餘毒の延びて民を疲らし國を弊らすに及び、以て今日あるを致せり。之をして永く其弊に居り、卓然として自立する能はざらしむるの、皇天の心は非ざるべし。幸に基督教あり此間よ

入り、其光明の質を以て斯民を教へ斯俗を化しなば、皇天の徳日本國民よも及びて、日本國民の始めて敗風頽俗の境より得脱するを得ん。

○基督教を日本よ迎ふるの道としての第二維新の偶然の好機會なるべし。第二維新の義の著者説く所の如く風教道徳上の問題なるや否の之を別問題と爲さんも、兎も角之よ由て社會上よ多少の波瀾を湧起すべきの必然の勢あるよ、宗教の平和の武器なりといふものよ、各人个々宗教心の發動するの其心意激昂の際に在る者あれば、此の如き波瀾の湧起せられ、人心其平を得ざるの間、宗教家が得て乗すべきの機なり。サレバ第二維新を以て單よ政治上の競争に出づるとするも、宗教家の之を視るに對岸の火災の如くなるべからず、必ズ又其機よ投じ宗教の必要を鼓吹し、他の宗教心を啓發すべきなるよ、況して著者の視る所にして悞たずば、第二維新の政治上の過渡

の期よ非ず、風教道徳上の革新を希望する時機なれば、身を以て宗教界よ役する人士の殊に警戒を要すべき者なり。宗教家としての此の如き時機を等間に看過せざらんと、當然の義務あるべし。

○但シ廣く宗教家といひ其中よの佛教家をも含むべく、神道家をも含むべく、又儒教家をも含むべく、其外回々教、猶太教、印度教等をも含むべきなれど、回々教、猶太教、印度教等の、未ダ其種子をも日本よ下さざるのみか、日本の斷じて之を迎ふるの意なければ之を省き。神道、佛教、儒教の已よ幾度か我國よ試みられて其功を奏せず、其徒も此際よ於ての躍り出づる面目なかるべく、社會も亦再び其跳梁よ任せんとも欲せざるやうなれば之を除き、殘す所の前よも言へる如く獨り基督教のみとなるなり。即ち其含蓄する所の極めて廣大あるが如きも、次第よ其要素を點檢すれば一基督教家に歸するの外なきを見るなり。此よ於て宗教家起たざる可らざるの絶叫

の、明に基督教家起たざる可らざるの要望と爲る。是豈基督教と取り千載一遇の機会と非ずや。

○基督教曰く地は泰平を出さんが爲る我來れりと意ふ勿れ、泰平を出さんと非ず、刃を出さん爲る來れりと。宗教の國民は信せられんとするや、其初は於ては必ず多少の誤解、衝突を免かれざる者なり。此を以て佛教の如きは、自ら争亂の端を啓きて其激昂動搖の機に乗じけり。是我上世史を讀める者の知る所あり。第二維新の言論の戦争のみ、平和の過渡のみ、絶へて佛教渡來の當年の動搖は類せざるも、而も基督教新渡の今日も當り、我國が宗教的革命を要せんとして、端なくも第二維新の時機を鎔成し、人心其平を失ひて、慷慨激越の狀を爲せるは會したるは、何等の微妙なる皇天の作用ぞや。基督教家の必ず皇天の命意の在る所を探り、之を默會して時宜を失はざるの備へを爲すべきあり。夫れ佛教すら天意の此は在るべきを信

するは於ては、斷々として堅を被り陣は臨み、水火の間は奔走するを辭せざりき。基督教徒にして此に如かざるべけんや。況や日本の國民の中より事亂を醸成し、基督教の入り來りて撫綏せんを求むるに於てをや。此に於て第二維新を善處するの責、日本國家を改造するの責は全く基督教徒の双肩は繋がり、基督教徒の責天下は重し。

第九 基督教徒の責任

○基督教新教の日本に於る渡來以後未だ久しからずと雖も已に三十年を経たり。三十年の之を月にすれば三百六十月なり。之を日とすれば一万九百五十日なり。一人の牧師あり一日一人の信徒を養成するとせば早く已に一万九百五十人を得べし。一週間一人を改化せしむるも一千五百六十人に下らざるべし。一牧師の力にして此の如しとせば、三十人の力を合すれば四万六千八百人を得べきは、宣教師

牧師の實數の三十人の愚と、百人千人の多きを以てして、未だ此に至る能はざるの何ぞや。加ふるは我國民の元來宗教上の饑渴は瀕せる國民されば、若し宣教師牧師をして基督教を身し、身を以て其光輝を發揚するとせば、我國民の水の低きに就くが如き勢ひもて之に歸向すべく、其狀たる世界無比の盛を極むべきあり。而して其實況の全く之を反せり、誰か我基督教徒に對して憮然たらざる者ぞ。○且つ又男女老少打交せて四萬の信者を有するもの、勢力としての侮るべきは非ざるも、將は四千萬衆總体を改悛せしめざれば休止せざらんとする大抱負を有する者としての是將は九牛の一毛に値らざらんとす。尤も宗教上の目的の、數量以外に深意あり、之を以て盛衰の標との爲すべからざらんも、サレバトテ右等の大抱負ある者にして、基督教が社會に與へたる少小の影響、例へば婦人矯風會、廢娼會、青年會等の如きを以て、此も基督教の賜あり、彼も基

基督教の恵みありと爲し、己は非常の事業を成功したるが如く、得意揚々たるの怪むべきあり。百里は達せんと欲する者の九十里を以て半とするとかや、志望の遠大なる者の必は此活達の雄識あるべし。些々たる事業を誇り顔は唱説するの寧ろ我有識者の笑ひを被らざらんや。戒めても懼るべきとなり。而るに談の基督教に及ぶれば、必は以上の諸事業を以て答へと爲す、是將は人間羞耻の事あるを知る者や。抑々基督教の我國家に負へる責任を知りての故か、知らずしての故か、慨すべきの至りあり。○日本が今正は宗教上の饑渴は瀕せるの争ふべからざるの事實なるも、更に又幾多宗教の中、基督教を選びて、之を迎へ入れんと欲するも、疑ふを要せざる眼前の傾向なるも、必は之を迎へ入れざるべからず、迎へ入れざれば國危ふく、迎へ入るれば國安かるべしと觀察するの道理の上の推測あり。而して此推測の時勢は由り境遇は由

り右にも轉じ左りよも移るべく、必ず此に至るべしとの斷定すべからざるなり。想ふに我國民をして基督教に順ひしむるよも若くば之は逆ひしむるにも、與りて至大の關係ある者、我基督教徒の性情、行徑、氣風なるべし。即ち其氣風にして國民の仰慕する所と爲り、其性情にして國民の敬重する所と爲りあば、我國民の歡然として之に歸向せん。若し然らずば拂然情を激して相反目せん。孔子曰く道能く人を弘むるに非ず、人能く道を弘むるなりと。今の基督教徒たらん者の銘々に此心得あるべきなり。卿等の向背に由り將に基督教の汚隆盛衰すら決せられんとするなり。

○更に之を考ふるに宗教は其國々の特色習慣を帯びたる者あり。是其故に宗教は國民の熱心を籠めて歸依する者あり。自國に移以てならん。之を以て從來他國民に信せられたる宗教を、自國に移し植へんとするに極めて慎重なるを要するなり。國と國との相同

からざるの人と人との其面を同くせざる如くなれば、他國民の特質、習慣を鑲刻したる禮拜、歸敬、集會の法を何等の用捨もなしに迎へ入るゝの不情理の甚しき者なり。必ず其皮毛を排脱し、其異様の裝飾を去り、渾然赤裸々の姿もて入り來らしむべし。眞理の赤裸々よせられたるを以て價值を減する者に非ず、却て其光輝を發する者なり。著者の此點に於て、基督教を日本風よ化せよとの局外者の注文は同情なからんと欲するも能はず。而して之を此に至らしむるに已に改宗したる基督教徒の任あらん。是又前章の基督教を聖化して光りを外よ放ち、之を善用して内を治むるとの意に適ふ者なり。已に此に至るを得ば日本の期せずして基督教藥籠中のものたるべし。

○轉じて第二維新に對する基督教徒の責任を論ずるに至れば、著者の此點に於ては基督教が今日已に四萬内外の信徒を有するを以て多しと爲す者なり。其故に我社會に團結の精神欠乏せる、替て著大か

る結合体を見ざるを以て、四萬も餘れる基督教の軍隊に以て横行して濶歩するも足ると信するあり。看よ、我社會に絶大の勢力を振へる自由黨すら其總員を算するも未だ七萬も上らず、改進黨の如きは近來稍好氣運に向へりと雖も其總數の一萬五千も上らざるべしと云ふ。假に改進黨の總數を以て一萬五千なりとせば、ソハ基督教の勢力の半も達せざる者なり。之を二萬ありとするも尚ホ三分の二に満たず、而るも其政界に呼號して堅を破り強を降す其勢力の如何ぞや。而して其自由黨と改進黨とを問はず、主義の飄搖として、所執の確一ならざる、更は結合力の薄弱にして、昨日の黨員今日の仇敵の如くあるもの、黨員多しと雖も何ぞ頼むも足らん。之を基督教の結合鞏固にして主義一定動かすべからず、信念牢として抜くべからざるも比せば、我強彼弱、我優彼劣、智者を待ちて後に知らざるべし、基督教の精銳を以て之も對せば一以て十も當るも足るべし。即

ち基督教四萬の軍中への婦人女子を含めりとも此を以て彼も比すれば四十萬の衆なり、是豈用うるも足らざらんや。

○而る時よ熱心なる宗教信者としての進みても開かんとすべき社會上の大革命の、第二維新の名を以て生じ、人心の激越昂進せる今日を以て最と爲す。假令其運動者の覇氣滿々たる政治家にして、與に宗教上の趣味を語るも足らず、已に第二維新の目的を誤解して本領以外に奔馳せしめたるの嫌ありとも、之も由て第二維新の必要益々確實と爲り、而して宗教道德の革新の日を逐ふて迫切し、終に從前の諸宗教を排去して、一躍基督教に向へんとするの氣運をさへ示せしめるも、基督教の陣營の白旗倒れ伏して寂々聲なく、突進の氣合さへ明ならざるの遺憾の至りならずや。或は沈重自ら發せず其輕舉を避くると曰はんも、今日已に其運動の方面を政治家より横奪せられて、尚ホ沈重を粧ふの臆病と謂ふべく。其人事も無頓着よし

て、此ほどの好機を雲煙過眼視するの惜みても餘りあるとあり。ア
ハレ一人の豪傑あらば此機を外さずして撥亂反正の運動を爲し、世
人の耳目を聳動して、一舉も動かすべからざる大磐石の基礎を打建
てんものを、而して四萬の精兵、歩武肅々として仁義の戦ひを爲さ
んの何れの日ぞや。

○若し夫れ基督教徒よして此好機も辜負し、觀望して肯て戦はずん
ば、第二維新の又しても効を奏せず、世の一面も無神論、唯物説の
有る歸して、現在主義得たりかしこしと其威を振ひ、不義不徳、累
積して堆を爲せども、之を制止する綱紀なれば、看る者も見て常
事と爲して怪まず、百鬼夜行、群犬群吠して極まる所を知らず、其
放逸混雜の態今日よりも甚しきに至らん。此に至りて基督教の仁愛
を説くも亦迂ならずや。果して仁愛の旨も富まば何ぞ此極に至らざ
るに及んで之を救はざる。其始め手を舉げて救ひを求めし者を、看

て見ぬ振りして之を過ぎ、後ち其全く沈落せるも及んで、俄も舟師
を喚び、珠網を投じ之を救ひ上げんとするも無益なり。基督教が斯
かる虚偽者の轍を學ばざらんと、我國民の望む所なるべし。

○顧るも佛教儒教の如き、第一維新の政治家よ、寧ろ疎外して厭
棄せらるべき位地も在りしも、一旦其改革の原因政治に在らずして
宗教道徳も在り、幕府の政權を皇室に歸しまゐらせたるのみよて、
國民の要望尚ホ未ダ充たされざるを見るや。即ち自ら薦めて其望み
を果さんと欲し、聊か馳騁する所ありたり。此を以て朋治の宗教界
を神道、佛教、儒教の權柄も屬せりと謂ふも亦不可なき有様と爲れ
り。不幸よして掉尾振らず、大も啓發する能はざりしも、而も其維
新の事業も干與し國民の要望を充たさんと欲したるの功の没すべか
らず、殊に其國民の要望する所を看破し、自ラ薦めて應分の責を盡
さんとしたるの眼識の凡からざるを見るなり。基督教にして若し今

日の機會を投ずる能はず、世を厭ふて自ら高しとし、而して絶へて第二維新の其成敗利鈍を關與せずば、是即ち基督教の神儒佛敎の爲したる所をも爲す能はざる者なり。憐むべからずや。

○此故に基督教今日の要の敢然突進して其職とする所に殉するに在り。假令成功する能はずとも亦以て國事は辜負せざるの名あり。悠悠閑觀、之に關知せざるは優ると萬々なり。若し夫れ其成敗を氣遣ふて之を關知せず、第二維新に對する國民の希望の宗教道德の點に在るを知り乍ら、之を投ずる能はずんば、基督教の義を見て爲さざる勇あきの類、必す臆病卑怯の誹りを受けん。此の如くにしても尙ホ一日の餘命を食ひたさきものや。抑々此の如き教にして尙ほ我國民を強くし其正大浩蕩の氣を吐くに足るか。餘人のイザ知らず、著者の天下に卒先して之を攻め、而して其餘孽を我國土に遺さしむるを期せんと欲す。他なし此の如きの宗教を以て我國民を救はん

とするの木は縁て魚を求むるにも類し、到底成功の期あるべからず、殊更に儒佛二敎を排して代ふるに基督教を以てするの利あるを見ざればなり。夫れ儒佛二敎迂なりと雖も已に我邦千年の宗教なり、之と優劣なき新宗教を迎へて少時の安を貪らんより、舊來の宗教と相抱持して之と始終するも亦東洋義人國の名を成すは庶幾からずや。基督教として終に我國を救ふ能はずんば、著者の寧ろ此事あるを希ふなり。

○ア、國家幸に基督教を要するは、基督教徒の因循にして姑息ある、即ち之に應じて其望みを充たし其力を張る能はずんば、然らば則ち基督教の所謂道との將々何する者ぞや。其徒平生相比集して、愛國と曰ひ義勇と曰ひ仁愛と曰ふもの誇張の辭は非ずんば即ち虚言ならん。以て訓と爲すは足らざるあり。基督の訓なる者を聽くは、正大にして奇偉、仁愛にして敬虔、些の虚飾なく、些の浮辭なく、山岳

も以て高しと爲すに足らず、河海も以て廣しと爲すに足らず、天人に亘り、古今も通じ、明を日月と争ふも遜色を見ざるに、適々我道徳界の腐敗をだも救ふ能はず、第二維新の來りても風俗の革新せられず、又第三維新を喚び、第四維新を起し、黨禍争競、殆ど寧日なく、國民をして奔命も疲るゝに至らしめば、是果して誰の罪ぞや。超妙比なき基督教をして即ち其靈威を失ふて一片の浮穢も過ぎざるの冤を被らしめば、是果して誰の罪ぞや。而して基督教と我國家をして共々與ふ此に至らざらしむるものは是果して誰の責ぞや。基督教徒諸君子の今も於て宜く猛省せらるべきなり。

第十 結論

○邦國の病なるもの、其類の多くとも、最も憂ふべきの風俗の頹敗なり。風俗一たび頹敗すれば、善制良法ありと雖も、施すべきなし。

必ずや一代の偉人英雄の士を得て之を匡救すべし、然れども敗風頹俗の世の英雄偉人を生すべきも非ず、英雄偉人の必ず良風美俗の中より生ずるなり。基督曰く誰か荆棘より葡萄をとり蒺藜より無花果を採ことをせん、凡て善樹の善果を結び惡樹の惡果を結べり、善樹の惡果を結ばず、惡樹の善果を結ぶと能はざるありと。社會も亦此の如し。敗風頹俗の世の便佞惻巧の士を生じこそすれ。英雄偉人、雅量海の如く、德望鶴の如き人物を生ずる能はざるなり。而るも世の活動するの英雄偉人の力なりとせば、英雄偉人を出さざるの國家の已も覆没も迫れるなり、餘命將に長からざらんとす。我國家の今日を觀るよ、長嘆すべきもの何ぞ其れ多きぞや。數多き病を一ツとして患ひざるの無きよ、最も重き風俗頹敗の病よさへ已も懼れるなり。之を如何ぞ生死を賭しても其看護よ力めざらんや。我邦家をして東海の表も巍然たらしめ、其國旗をして千秋萬古、萬邦も冠絶せ

しめんと欲せば、今に於て宜く心血を絞り畢生の手術を盡すべきなり。今日よ於て悠々たるものハ國の大事を顧みざる嗚呼のしれものよやあらん。

○所謂朝野の人物を觀よ、皆佞倖好の徒のみ。一人の慷慨義烈の徒ありや、一人の任俠義勇の徒ありや、一人の至誠愛國の徒ありや、一人の仁愛忠恕の徒ありや、一人の温恭沈重の徒ありや。皆在らざるあり。在る所の者の、佞倖巧、世を紊り俗を害するの徒、要するよ衰世の産のみ。知るべし我社會の風俗頹敗ハ、已よ偉人英雄の士を産する能はざるに至りしを。已よ此極に至る、坐して死を待つべきか、是臣子の忍ぶる所よ非ざるも、社會風教の頹敗せる、終よ偉人傑士を産する能はずとせば、誰と共にか國家を經紀し、已よ膏肓に入りたる敗風頹俗の病を治せん。

○是蓋シ尋常の手段の能する所よ非ざるあり。人力の以て企及する

第二 維新と基督教

所に非ざるなり。必すや神明の力よ頼り其救護を仰ぐの外、他策なけん。凡そ人の疾痛慘怛の際よハ必す父母を呼ぶとかや。國も亦然らざるを得ざるなり。日本の今日よ於て救を求め、憐みを請ふべきハ神明の力のみ。神明よ訴ふるの道の祈禱は在り。祈禱の道の宗教よ備れり。宗教ハ神の眞理を記載したる道よして、此内よ入れば、人の窮乏を忘れ患難を忘れ、而して助援を得慰藉を得て、平安を得希望を得。國も亦此の如し。已に敗風頹俗救ふ可らざるの極に陥りたらば、神明よ求むるの外偉人傑士を生ずるを得ざるなり。偉人傑士を生せんと欲せば、必す神明に頼るべし。此を以て我邦の今日に失望して惆悵せる者の、孰も天の一方を望み見て、超自然的勢力に由り、偉人傑士の産出せられんをを望望せり。想ふよ所々の江畔樹陰よ立ち止まり、精神を籠めて熱心の祈りを爲しつゝある者必すや多からん。

第二維新と基督教

○此際萬人の望みの齊しく基督教に向ひぬ。基督教の我邦に於る、由來異端邪宗門を以て目せられたり。今も尙ホ其異圖を蓄へ危謀を挟むべしと疑ふもの少あからず。而るに卒然として其必要を叫破さる。世人も亦傳説の誣妄にして其眞を得ず、其忠孝仁愛の教に富みて人を訓へ世を益するに足るを知りたるか。蓋シ是を以て我國民を強くし、其敗風頹俗に克ち得て、再び剛健朴茂ある古の風に回らしめんと欲するなり。又能く我國家の病の存する所を知り、症に對するの藥を下す者と謂ふべし。知らず基督教の何を以て其殊遇に感ずるに酬ひんとするか。之を惡罵醜詆、交々臻るの際より抜き、滿腹の群疑を排して此優地を與へられたるの、其勞實は少小に非ざるなり。與へて感恩せざるの彼の過ちあり、與へざるの我の過ちなり。社會已に我に與ふるに此大恩を以てす、基督教徒の感ずる所あかる可らざるなり。想ふに必ず殊功を建て、其大恩に酬ひんとすらん。

第二維新と基督教

而して其方法手段の如きに至ては、已に中々熟する者あるか。○此時は當りて第二維新の必要の叫破せられ、民間政黨の如きは其百戰百勝の精力を盡くして此一方に向へり。事体の關する所少小に非ざるが故に政黨以外の士も亦響應して此軍に投じ而して其本望を達せんとせり。而して其本望を檢すれば、全く風教上の改良革新あり。此を以て此問題の獨り政治家の手は委す可らずして宗教家の力を加へざる可らざる問題と爲れり。即ち基督教徒の手を染めざる可らざる問題と爲り。我國家と基督教徒との關係此に於て全く成れり。已に盛望を以て迎へられたる基督教の、今や當に坩堝に加へて其眞膺利鈍を檢せらるべきの位地は立てり。而して金か銀か銅か鐵か鉛か錫かの檢出せらるるも將に遠きに在らざらんとす。其檢出せらるるの日は基督教の成敗の決せらるべき日なり。而して成敗を決せらるべき標準を爲す者の基督教徒諸君子なり。基督教徒諸君子の向背

第二維新と基督教

に由り、國民の基督教を眞とも認め假とも認め、純とも定め駁とも定めんとす。其期の已に迫りて目前に在るこそ戒めて懼るべきならずや。且つ是獨り基督教盛衰の由て決する機のみならず、是亦將に我國家の盛衰浮沈の由て決する期ならんとす。僅々たる四萬の信徒のみ、而して國家の盛衰の責を任じ、四千萬衆の浮沈を代り荷はんとするの。其境遇も難儀あるべけれど、其健氣も以て賞すべきに非ずや。首尾能く大事を成さんか、將に就す能はざらんか。成敗の決り榮辱の分るゝ所、著者の悲喜兩様の感を以て其成敗を觀て、國家が此時より剛健朴茂の風を還り、以て傾覆を免れんことを懇禱する者なり。誰か第二維新を以て基督教徒關心の時期ならずと謂ふや。

第二維新と基督教終

明治二十九年五月十一日印刷

明治二十九年五月十五日發行

東京麹町區元園町二丁目

著者 田川大吉郎

東京神田區表神保町六番地

發行者 若林鑒太郎

同芝區櫻田本郷町十二番地

印刷者 乾義太郎

同芝區琴平町七番地

印刷所 警醒社印刷部

同京橋區出雲町一番地

發行所 警醒社書店

幾行司 警顯 坑書 乱

同京蘇國出雲田一巻紙

田隱雨 警顯 坑書 乱

同京蘇國平田七番紙

田隱答 諺 義 太 源

同京蘇國田本條田十二番紙

幾行司 芥林 鑿 太 源

東京蘇田蘇蘇條田六番紙

著 著 田 川 大 吉 源

東京蘇田蘇蘇田二十目

開卷二十次平正良十三日發

開卷二十次平五月火日開

